住民の眼で見つづけた多摩川の30年

—蓄積データ解析による自然の変遷と自然観の変化についての研究—

２００２年

柴　田　隆　行

多摩川の自然を守る会代表

目　　次

1．調査・研究の概要

① 調査・研究課題 …… 1

② 代表研究者・共同研究者名 …… 1

③ 目的 …… 1

④ 方法 …… 1

⑤ 調査・研究の時期 …… 2

⑥ 助成額とその内訳 …… 2

⑦ 実施内容 …… 2

⑧ 研究中の公刊物 …… 3

⑨ 今後予想される効果 …… 3

2．調査・研究の成果

(1) 多摩川の自然を守る会機関紙掲載の多摩川自然観察記録から …… 4

(a) 自然観察記録をまとめる意味 …… 4

(b) 観察記録からわかる多摩川の自然の変遷 …… 6

(2) 『多摩川自然観察記録』発行とその反響 …… 11

(3) 西暦2000年の多摩川を記録する運動住民参加型一斉調査から …… 20

(4) 『緑と清流』掲載自然観察会参加者の感想文から …… 23

(5) 大人になった目で見た多摩川 …… 36

(6) 総括 …… 47

1．調査・研究の概要

① 調査・研究課題

住民の眼で見つづけた多摩川の30年

―― 蓄積データ解析による自然の変遷と自然観の変化についての研究 ――

② 代表研究者・共同研究者名

柴田隆行（代表研究者、全分野総括）

矢萩隆信（河川環境）・柴田秀久（現況調査）・篠　清治（生物調査）

③ 目　的

研究員が所属する多摩川の自然を守る会は、1970年２月８日に発足し、日本で最初の住民運動型自然保護団体に数えられる。会の特徴は、(1)野鳥や野草の愛好家団体でもなければ学者・研究者団体でもなく、ただの市民・住民が身近な自然環境の破壊に抗してやむにやまれず始めた運動であること、(2)つねに市民・住民の目で多摩川を歩き見て考えることを原則とし、自己学習の場である月例自然観察会を1972年以来続けて350回に及ぶこと、(3)河川環境改変に対してただ反対するのではなく、代案を提示したり、河川管理者や地方自治体に「自然教育河川構想」などを提起すると同時に自らそれを実践したこと、(4)建設省（現・国土交通省）による河川環境管理計画の策定に参画したり、同省河川環境保全モニターとして河川管理者に助言するなどしていること、などである。2000年に多摩川の自然を守る会は結成30周年を迎え、これまでに収拾した膨大な資料を整理し、公開できるものにする必要があると考えた。しかし、ただ過去の資料を整理するだけでなく、西暦2000年という新しいミレニウムが始まる現在と比較対照させることで、市民・住民が見つづけた多摩川の30年の歴史を明示的にすることを目的とする。

④ 方　法

(1) 多摩川の自然を守る会の機関紙『川のしんぶん』ならびに『緑と清流』の記事および自然観察手帳などから、野鳥や野草などの調査記録を摘出するほか、クツワムシやマツムシの声がいつまで聞かれたか、カワセミはいつごろから減りまた目にするよう

になったか、モトクロスやホームレスなどの社会現象がいつから目立つようになったかなどのトピックスを取り出す。

(2) 「西暦2000年の多摩川を記録する運動」（実行委員会代表横山十四男、事務局は多摩川センターに設置）のうち5回行われる住民参加型一斉調査を共同で運営し、そこで得られたデータを過去30年の記録と対比させる。

(3) かつて子ども会員として自然観察会に参加し、観察記録や感想文を書いたことのあるひとたちに現在の多摩川を見てもらい、多摩川がどのように変わったかあるいは変わらないかについて、大人になった眼で多摩川の印象を語ってもらう。これを含めて、これまでに記された自然観察会の感想文を比較対照させて、自然観の変遷をたどる。

⑤ 調査・研究の時期

開始2000年4月1日、完了2002年3月31日

⑥ 助成額と支出内訳

- 2000年度　助成額 881,000円

  支出内訳：消耗品費 123,607円、旅費交通費 14,440円、謝金 672,560円、通信費その他 70,967円、合計 881,574円（この他に会自費による支出あり）

- 2001年度　助成額 1,062,600円

  支出内訳：消耗品費 117,170円、謝金 458,000円、通信費・印刷製本費等 489,704円、合計 1,064,830円

⑦ 実施内容

＜2000年度＞

(1) 研究プロジェクトを立ち上げ、具体的な実施計画を立て、手持ち資料を複写した。その後、会の機関紙のうち、『川のしんぶん』を中心に自然観察記録を抽出し、日付順に並べた。整理が比較的容易な野鳥について、表計算ソフトに転記して、一覧表にした。

(2) 多摩川現況調査として、西暦2000年の多摩川を記録する運動実行委員会に加わり、その事業のうち「住民参加型一斉調査」を担当した。一斉調査は、助成対象期間内では2000年4月23日、7月23日、10月22日、2001年1月28日に実施した。調査内容は、河川敷利用実態調査、廃棄物調査、タンポポ調査（4月）である。調査結果は、「一

斉調査ニュース」ならびに本会ホームページで公開した。これとは別に、多摩川現地調査を約30回行った。そのうち、水源地域調査を１回行った。

＜2001年度＞

(1) 初年度に複写・整理した資料のほかに、もう一つの会の機関紙である『緑と清流』からもデータを抽出し、両者を併せて年代順に配列し、若干の解説を付して一冊の報告書にまとめて公刊した。

(2) 多摩川現況調査として、多摩川現地調査を約30回行った。

(3) 2000年から2001年春に実施した「西暦2000年の多摩川を記録する運動」の実行委員会の一員として、そこで得られたデータを整理し、主として河川環境について現状分析を行った。この運動の成果の一部は、同実行委員会によって一冊の報告書にまとめられ、公刊された。

(4) 市民の自然意識の調査と分析として、多摩川の自然を守る会の機関紙などに掲載された、会員の自然観察の感想文を通して、市民の自然意識の意味と推移を分析した。また、かつて子どものころに会に参加したことのある人のうち３名に、いま多摩川について思うことを書いてもらった。

⑧ 研究中の公刊物

(1) 『「緑と清流」「川のしんぶん」に見る多摩川自然観察記録』2002年２月８日、多摩川の自然を守る会発行、300部。1972年４月から2001年12月29日までの多摩川自然観察記録と解説、多摩川自然観察地図、生物目録などを掲載した。

(2) 『西暦2000年の多摩川を記録する運動活動報告書』2002年３月10日、西暦2000年の多摩川を記録する運動実行委員会発行、1000部。西暦2000年の多摩川を記録する運動によって得られた諸々のデータの集大成。利用実態調査、カワウ調査、タンポポ調査、粗大ゴミ調査、ビデオ記録一覧、古老からのメッセージ、その他関連事業の紹介。

⑨ 今後予想される効果

(1) 国土交通省によって法的に策定された「多摩川水系河川整備計画」実施の基礎資料として生かされているほか、多摩川リバーミュージアムの事業立案ならびに計画遂行にあたって、本助成事業として公刊された『多摩川自然観察記録』、および本会がその編集を負担した『西暦2000年の多摩川を記録する運動報告書』に掲載されているデータが大いに活用され始めている。

(2) 多摩川の自然を守る会が30年間にわたり毎月実施してきた自然観察会に参加した会員および市民の数は膨大なものである。この参加者たちが、このたび公刊された記録集を読んで当時を思い出して各人なりに文書にまとめてもらうよう働きかけることによって、市民手作りの貴重な多摩川自然記録集が別途作られると期待できる。

(3) 多摩川の自然を守る会の自然観察記録は、特別の能力を必要としない素朴な内容のものながら継続によって一定の意味を獲得したものであるから、誰でも真似ができる。同じような運動が全国に拡がることが期待できるし、すでに各地で行われている。これらをいずれかの機関が集大成して整理すれば貴重な知的財産となりうる。

2．調査・研究の成果

(1) 多摩川の自然を守る会の機関紙掲載の多摩川自然観察記録から

(a) 自然観察記録をまとめる意味

多摩川の自然を守る会は、1970年2月8日、多摩川の河川敷が運動場として造成されることに反対して、結成された。運動を進めるなかで、守るべき多摩川の自然を、たんに知識としてではなく、市民が肌で身近に実感することが大切だとの考えから、多摩川現地での自然観察会が行われた。1970年11月25日、多摩川の自然を守る会のメンバーがリーダーとなって、親と子のための自然観察会を狛江五本松周辺で開催し、約150名の市民の参加を得た。その後、1972年4月に狛江で月例自然観察会を始めてから現在に至るまで、毎月1回の定例自然観察会を32年間にわたって実施している。

この自然観察会で使用するテキストとして作成されたのが、機関紙『緑と清流』である。これは、1972年4月に創刊され、2002年4月現在第340号を数える。これとは別に、多摩川の自然環境や保護運動について報告する『川のしんぶん』が1976年10月1日に創刊され、こちらは現在285号を数える。この間、会結成10周年ならびに『緑と清流』第100号を記念して、自然観察手帳『多摩川の自然』と記念号『緑と清流を』を発行したが、これを境にして、『緑と清流』は自然観察会当日に使用する地図と、前回の自然観察会の記録ないし感想文だけを掲載することとし、その他のニュースはすべて『川のしんぶん』に掲載することとなった。

これら両紙に掲載された自然観察記録の多くは会のリーダーによる記録であるが、一般参加者の記録も掲載されている。リーダーと言っても、野鳥や植物などに非常に詳しい者もいれば広く浅く知っているという者もいる。会員の年齢層も、子どもから

老人までさまざまで、職業は不問・不明である。多摩川に頻繁に出かける者もいれば年に数回だけという者もいる。しかも、ここに記された自然観察記録は、定例自然観察会やその下見で、あるいはその他の行事や会員個人による調査記録など、その性格や条件もさまざまであり、いわゆる科学的根拠に乏しく、主観的であり、誤認も十分ありうる。また、大勢で歩きながらの自然観察会では、花が咲いているとか大きな声で鳴いているなど、参加者の目や耳にとまったものだけが記されているにすぎない。観察された野鳥はいちおう網羅的に記録されているが、植物はフィールドに〝存在〟しているものではなく、花が咲いているか実がなっているものだけという場合がほとんどである。

それでは、なぜこのような欠陥の多い観察記録をまとめて公開しようとするのかについての理由として3点挙げられる。

1つは、「継続は力だ」と思うからである。30年という年月のなかで多摩川の自然も大きく変化した。かつて一般に観察されたものがいまはまったく見られなくなり、あるいは逆に、かつては見たことのないものがいまではごく一般的に観察されるというものもある。過去に遡ることができない以上、素人の記録ながら、長年にわたって蓄積された記録はそれなりに貴重なものと言えるであろう。

2つめは、自然観察の記録を通して逆にその自然を見る市民・住民の目が見えるという点である。一般市民は、専門科学者のように機械装置を使ったり訓練を重ねたりしてものごとを客観的に観察し記録するという方法をとらない。きれいな花があれば記録し、小さく地味な花は往々にして見過ごす。そこに個人史に基づく価値観が大きく反映する。その多くは状況によって異なるものであり、とくに身近な自然の価値はきわめて相対的なものと言える。そのような主観的な記録と専門家による記録を対照させることによって、双方の記録がいっそう深い意味をもつことになると思われる。

3つめは、かつて多摩川の自然観察会などに参加したことのある人たちに、そのころのことを思い出していただくためである。記録されたデータを事実だとする根拠は、とくに野鳥に関してはないに等しい。誤認も十分ありうる。だが、当時その場に居合わせたものにとっては記録を見ると当時のことがありありと思い出される。たとえば和泉多摩川の自動車教習所事務所の隣にあった空き地で鳴いていたクツワムシのガチャガチャという羽音はいまもはっきりと耳に残っている。多摩川の自然を守る会のような素人集団による自然観察記録の特徴として、このようないわば「当事者」が多いという点も指摘できる。復刻された観察記録を見て当時を思い出す人たちが大勢いるは

ずである。すると、記録に残されなかった別の多くの事実も呼び出され、いわば集団表象として、多摩川の自然がより豊かに復元できるのではないかと期待できるというわけである。

(b) 自然観察記録からわかることの一例

1 野 鳥

カワウ

いまや一度に数百羽の大群を観察することがあるほど、多摩川では多く見られ、漁業関係者に甚大な被害を与えている。西暦2000年の多摩川を記録する運動の一環として調査したカワウの数は、青梅万年橋から河口までの全域で、2001年1月23日左岸330、右岸310、同4月23日左岸83、右岸147、同7月23日左岸170、右岸156、同10月22日左岸1076、右岸680、2001年1月28日（天候雪）左岸282、右岸192であった。左右両岸から同じ個体を観察している可能性が高いので、両岸の記録を足すことはできないが、かなりの数が多摩川に飛来していることがこれで十分わかる。いわば社会問題化しているカワウだが、カワウが多摩川に大量に来るようになったのはそれほど昔のことではなく、記録集によれば、1977年6月に狛江で観察された記録が最初であり、河口付近（78年4月、83年1月、2月）を別にすれば、次に記録があるのは84年3月の狛江である。そしてそれ以後は狛江ではほぼ毎年観察されるようになっている。つまり、多摩川でカワウがふつうに観察されるようになったのは1980年代中頃からということができる。

ヤマセミ

一時期大栗川合流点で営巣しており、行けば必ず観察でき、これを写真におさめようとする望遠レンズを構えたカメラマンが行列した時期があった。生息地に近づく者も出たせいか、いまではあまり見かけなくなった。記録には残っていないが、1970年代は下奥多摩橋下流付近の左岸にはいつもヤマセミが止まっている木があった。記録集によれば、78年8月に是政を別にすると、80年8月氷川、81年7月万年橋、81年8月鳩ノ巣、82年8月丹波というようにほとんど奥多摩で観察されている。最近ふたたび下奥多摩橋から万年橋上流付近でしばしば観察される。

ハクセキレイ

多摩川ではかつて冬鳥だったが、最近は関東地方でもごくふつうに繁殖するようになった。繁殖期における観察記録としては1977年6月12日の和泉多摩川、1981年

6月21日の狛江、1983年6月12日の河口などが挙げられ、これ以後多数あることから、多摩川で繁殖が定着したのは1980年代始め頃からと思われまる。

タシギ

1975年12月14日の等々力渓谷での記録を皮切りに1987年12月20日の拝島まで、冬場の観察会ではよく見られたが、それ以後はぷっつりと記録が途絶えている。1999年2月21日の多摩大橋での記録が例外としてあるだけである。これは多摩川の環境の変化によって越冬個体が少なくなっているのか、繁殖地または渡りの中継地の環境変化により個体数そのものが少なくなっているのか不明だが、明らかな経年変化のある種だと思われる。

ヒメアマツバメ

かつて多摩川ではめったに見られなかったが、いまではごくふつうに見られる。記録によると、1978年8月上旬の是政での初登場以来、1980年以降はほぼ周年にわたって記録が認められ、いまでは冬にも観察できる。ヒメアマツバメはハクセキレイとほぼ同時期に多摩川に定着したものと思われる。

籠抜け鳥

1970年代狛江から調布の多摩川では冬になると多くの籠抜け鳥を観察できた。最も多いのがベニスズメで、ほかにギンパラ、キンパラ、ヘキチョウ、カエデチョウなどもしばしば観察できた。記録集では73年10月、75年12月、76年10月、11月、79年1月、86年10月、87年1月の記録が見られる。等々力渓谷や多摩川台公園などでは、70年から現在に至るまでワカケホンセイインコやダルマインコなど大型のインコ類を見ることができるが、多摩川の河原ではめったに見かけない。ここ数年前から増えてきたのがソウシチョウで、福生あたりから奥多摩の渓谷まで広く分布し、キビタキやクロツグミのような声で季節にかかわりなく鳴くので驚かされる。

その他

かつては比較的よく観察されたのに最近は昔ほど見かけることがなくなった野鳥としてハヤブサがいる。チョウゲンボウはいまでもよくみかける。

2　野　草

カワラノギク

いまでは文字通り絶滅危惧種になったが、かつては、羽村阿蘇神社対岸の大多摩観光総合運動場付近にカワラノギクの大群落地があり、そこを運動場管理者が除草

剤を撒いたりしていたので抗議したことがある。ここはいまは1本もない。次に大きな群落があるのは羽村大橋下流右岸だが、いまはここだけが唯一まとまって自生している場所となった。関戸橋下流右岸、大栗川合流点手前の高水敷にも群落があった。78年12月、79年10月、12月、80年12月の記録がある。80年に多摩市が大栗川合流点付近に野球場を建設することになり、1月下旬に河川管理者である建設省京浜工事事務所長にも参加していただいて現地で話し合い会を開いたりして反対した。野球場建設そのものは中止となったが、その代わりに多摩市は関戸橋から大栗川合流点までの高水敷に遊歩道も設け、堤防先端に野鳥観察小屋などを建設した。この遊歩道建設と低水護岸工事でここのカワラノギクは絶滅した。このほかに、浅川合流点付近の多摩川の河川敷にも大きな群落があったが、モトクロスとラジコン飛行基地、そして増水のために絶滅した。おそらくここから運ばれたタネが左岸に根付き、現在府中四谷橋がかかっている付近に1万株を越えるカワラノギクの群落があったが、橋の建設で半減したのち、私たちの人工撒種の甲斐もなく3度の洪水で絶滅した。94年から95年に観察されている府中のカワラノギクは私たちが蒔いたタネが発芽したものである。

カワラニガナ

レッドデータブックに載っているカワラニガナは、花期が長いこともあって、洪水で丸石河原が頻繁に現れたり流出してもしぶとく生き残っている。77年5月から2001年12月まで、多摩川のどこかで開花個体が観察され続けている。記憶に残る最も下流にあった群落は是政橋下流左岸で、東京都が橋の架替工事をする際にこの群落を守るため都に協力してもらったことがある。丸石河原が大水でしょっちゅう洗われる上流もカワラニガナは見られず、青梅万年橋上流がいまわかっているかぎりでは最上流である。

カワラハハコ

多摩川にかぎって言えば、カワラノギク以上に絶滅のおそれがあるのが、カワラハハコである。78年12月関戸の記録があるが、これ以外はすべて日野市地先と永田地区のみの記録である。

カワラナデシコ：かつて中央線鉄橋下左岸にカワラナデシコの群落があったが、立川市が「日本タンポポ園」なる名称の人工公園を造ったために絶滅した。しかもこの公園は造成した翌年の洪水ですべて流出した。76年6月以降現在に至るまで記録が続いており、いまでも府中の河川敷や日野から八王子の多摩川の土手で見るこ

とができる。

カワラサイコ

河原特有の植物だが、これはかなりしぶとく繁殖しており、狛江より上流ではふつうに観察できるが、上流は羽村あたりまでである。

カワヂシャ

75年6月以来96年3月まで記録が残っていますが、いまでもしばしば見かけます。ここ2年ほど前から見かけるようになったのは外来種のオオカワヂシャであり、これが急激には増えつつある。

タコノアシ

花やタネがつく形が蛸の足に似ているのでこの名があるが、確かに足が生えているようにあちこちに出没する。比較的長く見られたのは永田地区にある小さな水たまりだったが、2001年の洪水で泥に埋まってしまった。洪水前は多摩川で8箇所生息地を確認している85年10月狛江、88年11月多摩大橋、89年11月狛江に記録がある。六郷鉄橋下にある小さな群落は地元の植物愛好家と建設省の協力により大切に守られている。

ウラギク

河口付近の汽水地域に生えるウラギクは自然の変化に影響されやすく、かつて群落が見られた大師橋下流右岸は土砂が堆積して数は激減した。いまは左岸で地元の人たちによって守られて可憐な花をつけているが、かつてウラギクの自生の群落があったところにホームレス・ホームが並んで建てられているのが現状である。

その他

記録集を見て懐かしく思い出された植物にクララがある。外国の女の子の名前みたいだが、毒があって食べると頭がクラクラするのが名前の由来とか。75年6月と80年6月の記録しか文字としては残っていないが、当時上河原堰左岸に行けば必ず見られる大きな株があった。最近は全然見かけない。ゴキヅルも調布地先の河原でたくさん見られたが、いまは絶滅危惧種に指定されている。80年代に猛威をふるったアレチウリは度重なる洪水のおかげでだいぶ減った。水辺は洪水や護岸工事の影響をもろに受けるので、ミクリやカンエンガヤツリなどは激減、ウキクサ類やホテイアオイの消長も激しく変化している。土手ではレンリソウやナンテンハギ、ウマノスズクサなどが減った。日本在来のオドリコソウも79年5月に下奥多摩橋下流右岸、83年4月の小宮地先に記録がある。下奥多摩橋下流右岸にいまも残るニセアカ

シアの林は、隣接する崖と一帯となって多くの在来植物が見られたが、崖上の土地が造成され、河原は増水で洗われて、いまは特記するものは何もない。代わりに増えてきたのがセリバヒエンソウで、かつてはきわめて珍しかった。記録集によれば、79年4月万年橋、同5月下奥多摩橋から始まり、83年5月に睦橋付近まで下がり、しだいに下流方向に分布域を広げている。いまや上流の御獄渓谷でもたくさん見られる。府中付近ではコゴメバオトギリが猛烈に増え続けている。2001年初夏に立川から府中にかけて水辺で大発生したハルシャギクは誰かがタネを流したと思われるが、9月の洪水ですべて流れ去ったと期待している。

3　鳴く虫

クマスズムシ

多摩川の自然を守る会は1973年以来毎年9月の自然観察会を「鳴く虫を聞く会」と題して、夕方に開催している。80年代には河原で豚汁やカレー、鉄板焼きなどの野外料理を併せて作って夕闇を待ったが、台風シーズンでしばしば中止になったのでいまは野外料理は止めている。つい最近まで開催地は狛江地先と決めていたので、虫たちの繁殖の変化を比較検討することができた。もっとも、聞き取るリーダーの能力向上も記録を大きく左右している。最初の頃は、鳴く虫の大家である松浦一郎氏を講師に招いて実施していたので、静かにしてジッと耳をすまさなければ聞き取れないクマスズムシの記録もすでに73年9月には見られる。以後、クマスズムシは80年代に最も人気のある虫となったが、90年代になって河川工事や度重なる洪水、そして何と言っても大騒音を発するアオマツムシのために記録が少なくなった。

アオマツムシ

最初の記録は78年11月に見られ、当時は珍しくみんなで聞き惚れた記憶がある。しかし、年々その数が増し、いまや都心から郊外、奥多摩まで8月下旬以降アオマツムシの騒音を聞かずに済むところはない。かつては恒例の「鳴く虫を聞く会」を9月初旬に開いていたが、9月に入るとアオマツムシの声しか聞かれないと言って過言ではない状況になり、臨時に8月中旬に開催したことも何度かあった。

マツムシ

チンチロリンのマツムシは、73年9月から81年9月まで狛江での記録があるが、その後聞かれない。いまは府中地先まで行かなければならない。かと言って、八王子より上流でも聞くことができない。

クツワムシ

73年9月に狛江自動車教習所事務所脇の草むら、75年9月に狛江五本松前の草むらで記録されている。宿河原堰前にある横山宅での事務局会議の帰りに土手に出ると、クツワムシのにぎやかな演奏が聞こえた。自転車で世田谷の自宅まで乗って行く途中、二子玉川園脇の丸子川（次太夫堀）沿いでもしばしばクツワムシの演奏を耳にした。

スズムシ

最近多摩川で聞かれるスズムシは誰かが飼育したものを放したのではないかと察せられる。

カワラエンマコオロギ

記録集によれば、78年6月に狛江で記録されてから、81年9月、83年8月、87年8月、9月、90年8月の記録がある。カワラエンマコオロギは貴重種であるため、1980年に策定された多摩川河川環境管理計画の地区割りをめぐる協議の際に、これを守るために或る地区をランクアップさせた。81年以後に記録されているのは、この話を聞いた狛江在住のリーダーがそれなら狛江にもいるとして調べた成果である。しかし、最近はどうか。形式主義的な草刈りが、しかもいまは機械によって行われるため、逃げ場を失った虫たちが大量に殺されている。高水敷は災害時緊急輸送道路造成で掘り返され、低水敷はたび重なる洪水で洗われている。カワラエンマコオロギの生息状況について早急に専門的な調査を行う必要があるのではないかと思われる。

(2) 『多摩川自然観察記録』発行とその反響

(a) 配布先

本記録集は、2002年2月8日付で300部発行され、多摩川の自然を守る会会員に送付するほか、関係諸機関に寄贈した。

秋月祐司（横浜市）、市田則孝（調布市）、伊藤則子（狛江市）、植田睦之（小金井市）、牛田令（国分寺市）、大石悌司（杉並区）、片山ヤエ（国分寺市）、加納一男（大田区）、川口顕（八王子市）、河原慶二（川崎市）、川辺まゆみ（北海道）、絹山達也（狛江市）、君塚芳輝（調布市）、倉本宣（国立市）、倉持通夫（大田区）、黒田常俊（世田谷区）、越野ひろみ（羽村市）、小菅盛平（横浜市）、小林恒夫（三鷹市）、金光桂子（狛江市）、斎藤明子（八王子市）、佐藤正義（練馬区）、篠清治（狛江市）、柴田隆行（八王子市）、

柴田秀久（青梅市）、清水信之（狛江市）、清水康男（国分寺市）、新堀宏（世田谷区）、菅原征子（狛江市）、鷹野三千代（国分寺市）、高橋英子（立川市）、武石珠希（狛江市）、田沢忠男（狛江市）、田中保男（狛江市）、田村律子（福生市）、塚原ワカ子（北区）、堤康次郎（多摩市）、中山長徳（八王子市）、丹羽こと江（狛江市）、船越弘江（狛江市）、古屋のり子（大田区）、星野安子（町田市）、堀口咲榮（狛江市）、三浦茂（青森県）、森岡恭介（渋谷区）、森田英代（世田谷区）、矢島悠子（狛江市）、柳澤勝（昭島市）、矢野都紀子（狛江市）、矢萩隆信（多摩市）、山下ひろみ（横浜市）、山田隆子（大田区）、結城キミ子（世田谷区）、鷲谷いづみ（つくば市）、寺岡且浩（世田谷区）、上田大志（東久留米市）、黒田和子（中野区）、荒川ミチ子（大田区）、石綿松夫（世田谷区）、菊池和美（稲城市）、村川勝巳（横浜市）、磯田紀代子（川崎市）、米村誠（調布市）、高橋正臣（国分寺市）、武田信孝、馬越直美、及川喜一、水口正昭、亀山淳一、川岡千里、井村礼恵、倉持武彦、二宮尚子、市原広子、柚木修、園部由香、高島雅、金子敦子、南部隆也、山田克彦、道家毅、野村美子、森田鷹子、鈴木正美、大澤喬、神谷博、斉藤光明、平野紀子、木村成生、横山十四男、鈴木聖子、小岩井栄、飯田理恵子、伊東茂、榎本正邦、菅原京子、小林祐一、山岸秀子、永安芳江、はむら環境を考える会、大田自然を守る会、浅川勉強会、よこはま川を考える会、山道省三（多摩川センター）、小川潔（しのばず観察会）、大野正男（東洋大学）、増田直也（内川の自然を取り戻す会）、大和田一紘、長谷川博之、小林幸治、鷲見康子、佐々木雅則、神田川を考える会、二ヶ領用水の再生を考える市民の会、自然観察会編集室、とうきゅう環境浄化財団、日本河川開発調査会、八王子ランドマーク研究会、全国自然保護連合、日本鳥類保護連盟、日本野鳥の会普及部編集室、多摩川センター、三多摩自然環境センター、国分寺市並木公民館、多摩市立図書館、日野市役所水路清流課、東京都水産試験場大島分場加藤憲司、国土交通省京浜工事事務所、東京都環境局自然環境部、東京都立多摩社会教育会館市民活動サービスコーナー、リバーフロント整備センター、パシフィックコンサルタンツ環境部、羽村市郷土博物館、朝日新聞武蔵野支局、アサヒタウンズ本社、くらしの窓新聞社、東京新聞立川支局、毎日新聞立川支局、読売新聞武蔵野支局、産経新聞東京本社編集局社会部、多摩川と語る会、多田実、新学社東京編集部西山嘉文、埼玉大学共生社会研究センター、八王子・日野カワセミ会、多摩川源流研究所、八王子自然友の会、日野の自然を守る会、府中の自然を守る会、品田穣（元文化庁）、日本野鳥の会東京支部、国立科学博物館附属自然教育園、水環境ネット東北、矢間秀次郎（ATM研究所）、小倉紀雄（東京農工大）、川崎市教

育教育会館事業課、川崎市教育委員会青少年科学館、京浜工事事務所多摩川上流出張所、河川環境管理財団、国立国会図書館集書係り、大田区大田図書館、世田谷区世田谷図書館、府中市立中央図書館、日野市立中央図書館、国立市立中央図書館、立川市立錦図書館、昭島市民図書館、福生市立中央図書、羽村市立羽村図書館、青梅市中央図書館、奥多摩町立奥多摩図書館、あきる野市立秋川図書館、あきる野市立五日市図書館、東京都高尾自然科学博物館、京都大学総合人間学部自然環境学科、東京学芸大学教育学部　岡崎惠視、河川情報センター、建設・環境研究所技術2部安部純子、大田区土木部土木第1課榊原健司、東京都立多摩図書館、神奈川県立図書館川崎図書館、石井、服部、熊沢、狛江市図書館

(b) 反響から

加藤憲司（東京都水産試験場）

貴重な資料集であるとともに、多くの方々が、多摩川へさらなる関心を向ける契機になる素晴らしい本だと思います。大切に活用させていただくとともに、貴会の益々のご発展をお祈りいたします。私事になりますが、20年以上前、狛江の横山さんのご自宅にお伺いして、理子さんから「教育河川としての多摩川」についてのお話を伺ったことを思い出します。その時のことは、都政新報という、都庁の新聞に少し書かせていただきました。

佐藤正義（会員）

オメデトウ！　30周年記念刊行1972～2002。何故このように連綿と根気よくていねいに取組めたのかしら……！　何か、ある一点の目標に向かって、お互いが歩んでいるという稀有な人々の集り！　この秘めたる情熱の源は、いずこにありや……？ふと新刊本を手にとり想いました。心からの春を迎えたような快い気分です。

鈴木正美（元会員）

お久しぶりです。多摩川にずいぶん離れてしまいましたが、こういう活動記録を拝見すると大変な運動と改めておもいます。ありがとうございます。来週から立川のCILで、この夏予定している日韓障害者交流の準備事務局で仕事をおこないます。やはり多摩川周辺になりますね。自然観察ではなく、人間観察ですが。いただいた記録をもって、川面に出てみます。

上田大志（多摩川センター、会員）

昼間、多摩川センターに記録集が届き、みんなで興味深く拝見させていただきま

した。やはり30年間の記録の積み重ねというのはすごいですね。単なる名前の羅列なので、逆に説得力があるように思います。ひじょうに貴重な資料です。この膨大なデータを今後どのように活かしていくか、ぜひ考えたいところですが、この記録集は元データとしてこのままで良いと思います。そしてこの記録集と、『川のしんぶん』総集編をセットにすることで、そのときの環境や、課題などが一般の方でもよくわかるでしょう。また、157ページからの多摩川自然観察地図を見ていると、後のために記録として残しておくことの大切さを感じます。そのときの環境や課題について知ることができるとともに、それがどうなった（改善・改悪・それとも？）のか。そして「多摩川の自然を守る」ためには、今後どうしていったら良いのかも見えてくる。最新版のマップも編集しておきたいところですね。これは「西暦2000年の多摩川を記録する運動」の精神でもありますよね。私もつくづく感じていることですが、市民が中心になって取り組んだ調査や研究は、文字や数字といったかたちにすることはなかなか難しくても、参加のプロセスや素朴な感想などに、その成果がある場合が多いと思います。多くの人々がこれらの価値を認めて、かつ活かしていくことは、真に豊かな社会を実現するためには不可欠なことであり、市民セクターとして存在する多摩川センターが、そのために果たさなければならない役割はひじょうに大きいと感じています。「水辺の楽校」も「多摩川流域リバーミュージアム」も、最低限必要なハードや仕組みとともに、みんなの望んでいる姿を具現化しなくては成功は得られないでしょう。

長谷川博之（多摩川と生きる昭島市民の会）

大変貴重な記録で、じっくり見させていただきます。特に、野鳥と植物の記録は、継続性があり、多摩川の自然史としての価値は高いと感じました。中にある「多摩川自然観察地図」は、今後、いきものマップとしての発展性を想像させます。「多摩川市民行動計画」にも、森田さんの観察地図が掲載されましたが、市民フォーラムとしても、生き物マップや生き物ガイドラインの作成を課題としているだけに、いろいろご教示をいただけたら、と思います。ほ乳類（特に、アブラコウモリやカヤネズミ等）や両生類（アカガエルやナガレタゴガエル、サンショウウオ等）や魚類も視野に入れ、さらには、生き物の側からの視点という理由で、流域（崖線や丘陵との関わり）的な生き物状況が把握できたらいい、と考えています。

佐藤正義（会員）

会発足30周年記念の刊行に至るまでの労苦に心からねぎらいと感謝申し上げます。

『緑と清流』100号記念刊行の時（昭和56年３月）と同様の感激が、私の心に甦って参りました。組曲『多摩川』を想わせるように、香りが漂い自分が参加した項目にしばし目が止まりますと、20年前、10年前の情景が鮮明に甦りまして、思わず「アー」と叫びたい気持ちです。この度の刊行本をひもときまして、再発見しましたこと、(イ)手がき、手づくり、自分の個性を出している作品は見あきない！（自分で消化しきったものだけに）、(ロ)自らの心赴くままに歩き、あるがままにものをみる。ここで得た、“みる・きく・かく・はなす”ことは、真実味、人間味が出せる！（改めて、見直しまして、ホッと心安らぎを覚えます）、(ハ)自ら芽（学びの心）を出し、花を咲かせこうやって実を結ばせたものには、初心をつらぬく、思のつよさと、長い冬越しの後、春の花開いた明るさと自噴水の池の澄んでいる、清らかさが併せて汲みとれます。（“花の香りは知る人ぞ知る”）、(ニ)かねがね、仕合せとは(a)細々ながらもコツコツと、価値あることに取り組む息長い営み、(b)好きなことに、気心が合った者同志がその時その所で、有効、有意義に取り組めることと思っています。今、私共の会は、ここに至り、仕合せだなあ！という実感をいだいています。「さあ、これから……！」

古屋のり子（会員）

大きくて厚い冊子に驚かされました。巻末の地図など特に役に立ちます。私は図書館で『多摩川の自然』(黄色の表紙の本）を借りてくることがありますが、手元にこうした多摩川の情報の本があると重宝です。今後の観察にも役立てたいと思います。ありがとうございました。

伊東静一（福生自然かんさつグループ）

約20年も前、福生市公民館を会場に「社会教育研究全国集会」が開かれ、その一つの分科会で「自然保護」の分科会が開かれましたが、その時に横山理子さんといろいろな話をしました。当時の横山さんには、行政の施設・役割・職員のあり方など、ずいぶん耳の痛いことを言われましたが、それでも多摩川の自然を守る会が発足するキッカケとなったかんさつ会や、福生在住の石川操子さんの話など、いろいろと聞いたのが昨日のように思い出されました。河川生態学術研究会多摩川グループの方もなんとか毎月調査を続けていきます。

西山嘉文（多摩川と生きる昭島市民の会、新学社編集部）

30年にわたる活動すべてが収録されているわけではないでしょうが、心より敬意を表します。自分のことを振り返ってみて、何か継続してやっていることがないか

と考えてみましたが、せいぜい毎年元旦に高校のクラブのＯＢ戦に顔を出している程度です。柴田さんたちのようにはとてもできないでしょうが、昭島市の多摩川については継続して調査していきたいと思います。市民が休日に行うものなので、日頃のストレスを発散し、運動不足を補える活動にしたいと常日頃考えています。そうしなければ長続きしませんし……。

佐々木雅則（テレビ神奈川）

これだけの記録をまとめるには、根気がいる作業だったと思われ本当にお疲れさまでした。現在、私は多摩川の隣の一級河川、鶴見川を取材しています。やはり、川ごとに流域の歴史や文化、諸問題は違うものですね。鶴見川の方が複雑に絡み合っているようなイメージです。市民の活動は、多摩川のような歴史はありませんが、とても活発です。今回もそんな市民を通して、鶴見川のいまを伝えていこうと思っています。現在、まとめの段階となり、放送時期がきまりましたらお知らせします。

田中喜美子（多摩川と語る会）

30年余に渡るこの記録はとりもなおさず貴会の偉大な足跡であり、継続されてこられた熱意とご努力に深い敬意の念でいっぱいでございます。私共の会はやっと８年、“継続の力”もまだまだのようでございますが、多摩川を見る市民の目を共に豊かにして参りたいと念じております。これからもどうぞ御指導御鞭撻下さいますよう、お願い申し上げます。

高橋英子（会員）

書いて残すと云うことが如何に大切であるかよくわかりました。多摩川も日々変化してゆきますが、住民の目で常によい方向に変るよう努力する事が大事ですね。悠久の大河多摩川ですね。今後ともよろしくお願いいたします。

矢野都紀子（会員）

多摩川の自然を守る会の長い歴史からみると、ほんのわずかな期間でしかありませんが、ごいっしょさせていただいた頃を思い出しました。地図や記録をみながら、記憶を蘇らせ、しばし幸福な時をすごしました。リーダーの皆様の活躍に敬意を表し、心から感謝申し上げます。これから祖国の美しい季節が始まります。機会をみつけて、私も多摩川を歩きたいものです。とりあえずのお礼まで……。

畠山　環（会員）

何年分もの貴重な観察はじっくりゆっくりと楽しみたいと思います。とはいえ、ちょっとページを開いただけで飛び込んでくる生き物の名前の多さに圧倒されまし

た。生半可な知識ではとうてい読み切れません。頭をかかえました。記録と同じ時間をかけて読むことにします。先達の方々に感謝して大切にいたします。

鷲見康子（多摩川四ヶ領用水400年の会）

結成30周年おめでとうございます。また大変興味深い「多摩川自然観察記録」をお送り下さいまして有り難うございます。体力不足でフィールドワークが苦手ですが、このような記録をじっくり読み込んでゆくのは、大変勉強になります。30年のご活動内容の詳細を知るに至り、改めて敬意と感謝を申し上げます。

佐藤正義（会員）

「多摩川自然観察記録」を手元に置き、時折見開いています。春の息吹、どこかで春が、春一番、さあこれからという矢先、３／１、見事な仕上りを今更感心してます。（２年前の刊行本「多摩川の自然を守る会30年の活動記録」以来、じっと根気よく煮つめ、或いは磨き上げた感触がヒシヒシと伝わって参ります）。今は亡き創業者（草分け人）、よき理解者（例、横山理子さん、清水すみよさん、中井伸爾さん）も天国で祝福して下さっているものと想われます。生前、100号記念を手にされた、亡き清水すみよさんと同様の感動が私自身に湧き起こってます。柴田隆行さんの秋の野菊のスケッチをにっこりして「コレダ！」と太鼓判を押して下さった、亡き中井伸爾さん、青木村に眠る横山理子さんも、起きあがって、彼岸には「ヨクヤッタネ！」と喜こんでくれている。もう、心からの春を迎えた心地です。いつか、この本を発刊されるまでの、文には表わさぬ苦労話、こぼれ話をきかせて下さい。（私は、結果よりも過程を重視しよう！　ということで、努めて、核心に迫らんとして、横山さん宅での事務局会議に参加してました）。“花の香りは知る人ぞ知る”（新渡戸稲造）の評価は、多摩川自然観察会の仲間にピッタリ。天国で見守って下さる方からのお祝いとして記念送金させて頂きます。

ＰＳ。今、1988年４月、横山理子さんが亡くなった年から私共が、初心にかえって必死に取り組み、活動内容が実り豊かな方へと発展している様子を足跡と見直しまして、自ら励し再び学びの姿勢を糺さんとしてます。よき後見人が亡くなっても、このように変りなく継続しているグループは、“多摩川”だけですヨ！

山下ひろみ（会員）

1970年の会設立当時から今日までの30余年の長きに渡り足で稼いだ膨大な記録の数々が、私の目に飛び込むや、その実績の重さ、濃密さに、私は完全に圧倒されました。そして、胸が苦しくなりました。故横山様の御志を受け継いで、しかもすで

にそれを越えてここまで地道な努力をつみ重ねて来られたことに本当に感服いたしております。そして、この貴重な記録が今後広く各方面で色々に活用されて行くことを願わずにはいられません。これだけの実績を挙げると云うことは並大抵のことではなく、気が遠くなるような大変な努力の結晶だと感じ入りました。それにひきかえ、私自身はと振り返りますと、未だに役目を果たせない自分が悲しく情けない思いです。あの頃、30余年前といえば、私はまだ30代で元気でした。会の活動や観察会に参加していた頃の様々なシーンが瞼に浮びます。その後、様々な家庭状況と体調の変化により、一挙に下り坂を転がり落ちるような勢いで体力・気力を失ってしまったのが何んとも残念なことでした。一進一退をくり返しながらも、昨年の暮れにはかなり元気を取り戻して、新年を迎え、希望を抱いたのですが、先月には又ダウンしてしまい、今また少しずつ快復しつつあります。仲々気持ばかりが焦りますが、私はまだまだ希望を繋いでいます。皆様のご苦労を思えば、へこたれていはいられません。励まされます。長い間、殆んど筆を取っておりませんが、様々な苦痛と共存しながらでも、まだまだ頑張れる筈だと考えています。これ以上年を取らないうちに早く元気にならねばと身心のリハビリに心掛けています。皆様、どうぞお体にお気をつけてこれからも息長く活動を続けて下さいますよう願っております。

森田鷹子（元会員）

前略、御ゆるし下さいませ。思いもかけず、スッシリと重い「多摩川自然観察の記録」を御送附いただきまして、ありがとうございました。会に伺わなくなって何年もたって居りますのに御心に掛けられ、御送り頂きました事、本当に嬉しく、昔、多摩川を歩きました頃の印刷物をとり出して照らし合わせ乍ら、拝見して居ります。「自然を守る会」には柴田様が御二人で、大柴田様、小柴田様と覚えて居りましたので、どちらがどちらの御名前かわからなくなって居りましたが、これも昔の中埜独王亭先生の「森をつくる」の会報から (1975) 押して、この本を御送り下さった隆行様は小柴田様と思いましたので、そのつもりで書いて居ります。もし間ちがえて居りましたら御ゆるし下さいませ。世田谷の森の会に私が入れて頂いた時は小柴田様はまだ高校生位でいらした様に覚えて居りますが、その後結婚され、只今は立派な御父様で居られる事でしょう。そして私は只今満91歳、ひ孫３人（今年中には又２人増加）を持つとしよりになって居ります。拝見しながらこれだけの資料をおまとめになるのは大変な御仕事と深く感謝申上げますと共に、何も知らなかった私がこの会の御陰で本当の自然に接する喜びを頂いた事は御礼の申上様もございませ

ん。本元は横山理子先生と存じますが、御早い御逝去で今考えましても残念としか申上様もありませんが、御逝去後皆さましっかり先生の御志をついで御仕事をなさって居られます事、心から御礼申上げます。

私は昭和７年結婚、満鉄勤務の主人について満州大連、後に奉天住い十年で、上北沢に住む両親の願いで昭和18年の夏主人を大連に残し、子供４人を連れて北鮮経由新潟に上陸、東京に戻りました。それからの戦中、戦後の30年間、子供の成長、両親の死去等々で家庭内の自由時間は殆んど御座いませんでした。身体が自由になってからの体操、水泳、古典の勉強、加えて自然へのとりくみは何とも時間の足りないよろこびでした。主人は21年秋に漸く引揚げて参りましたし、幸に半年後体調を整え就職が出来ました。盛に動き廻っていた私は当時、歯は24本ありましたし、元気一杯でしたので、まさか骨粗鬆症とは夢にも思わず、少々無理を重ねた結果胸をいため整形外科に半年以上通院となりましたが、結局平成元年９月に左股関節人工骨置換といふ大手術となり慶応病院に４ヶ月の入院となりました。幸に充分時間をとっての余后で手術は本当に大成功、只今も年に１回レントゲンの検査をして頂いていますし週に１回骨粗鬆症の注射をし内服薬もずっと頂いています。今の年金の老人としてはどこも異常なく痛みもなく、長男一家と同居をしては居りますが、生活は独立。独りですべてをこなして居ります。入院のためすべての事はパーになりましたが、退院後はテレビだけの生活にたまりかね、世田谷区で施行しています生涯学習学級に応募し、半年の御勉強の後、そのシニアのクラスが今日迄12年自主運営でつづいて居ります。只今も京王線千歳烏山にありますセンターに部屋をとり学習、講義の勉強の外、歩行会、旅行等、週に２回は顔合せをして居ります。歩行会でたまたま多摩川畔を歩く事もあり、昔を考えて感無量でございます。永こと勝手に書き続けました。御判読頂ければ幸いでございます。我儘かも知れませんが若い人達がだまっていてくれますので或程度自由ですし有難い事と思います。末筆乍ら会の益々の御発展と御一家の御壮健を心から祈り上げます。

〔冊子を送ったのは、会の代表兼小間使いの通称「大柴田」の柴田隆行です。当時高校生で森田さんが思い出され、いまも植物「ハカセ」として活躍中の通称「小柴田」は柴田秀久さんです。ついでながら、毎回『緑と清流』にかわいい表紙絵を描いてくれるのは、秀久氏長女のかつらさん、次女のしおじさん、長男の甲斐君です。また、感想文に時折登場する順子さんは秀久氏の奥様です。―編〕

山田政雄（国土交通省関東地方整備局京浜工事事務所河川環境課。４月に異動）

年度末のバタバタで反応が遅くなり、すみませんでした。「記録集」を見て、あらためて多摩川の自然を守る会の活動のすばらしさを実感しました。公務のほか、個人的にも是非、利活用していきたいと思っております。

篠崎　毅（財団法人河川環境管理財団東京事務所）

観察記録を送付いただきましてありがとうございます。改めて多摩川流域の皆さんの熱心な活動の様子、又、これだけの貴重な記録を纏められました関係者の皆様のご努力にただただ脱帽です。突然お便りを致しまして申し訳ありません。紹介が遅れましたが、私は河川環境管理財団で東京事務所の次長をしております篠崎と申します。縁ありまして現在の職場に勤めておりますが、柴田様には京浜工事事務所に勤務をしておりますときに大変お世話になった者です。現在東京事務所では、国の機関等から委託を受けて河川環境に関わる調査研究をしております。たまたま、ある工事事務所の管内で住民の方が河川環境の観察会など立ち上げる話がありますのでそれらの方にこの「多摩川自然観察記録」を活動の参考に送付出来ればと思っております。

(3)　西暦2000年の多摩川を記録する運動住民参加型一斉調査から

一斉調査は2000年１月23日、４月23日、７月23日、10月22日、2001年１月28日の５回にわたって実施された。私たちはこの調査の総指揮を担当し、調査遂行のために必要な機材（レンズ付きフィルム）ならびに調査用紙等の購入のため、その費用の一部につき、本研究の助成金をあてた。

調査は、流域各団体ならびに一般市民の協力を得て、無事に予定通り実施できた。猛暑あり、積雪ありの調査であったが、河川環境についてのこれほど大規模な一斉調査は過去に例がなく、また今後もさほど容易には実現できないと思われる。その意味でも、これは非常に貴重な調査だと言える。今後多くのひとや関係機関によってこのデータが有効に活用されることが期待される。

調査結果は、西暦2000年の多摩川を記録する運動実行委員会発行の『活動報告書』にすべて掲載されている。この調査で明らかになった点を本報告書から引用しておく。

１）運動公園利用者が休日には非常に多い。

５回の合計で見ると、左岸では河口から3/4km（大師橋上流）、5/8km（六郷橋周辺から上流）、10/11km（ガス橋周辺）、12/13km（新幹線鉄橋周辺）、17/18km（二子

橋周辺)、24/25km（狛江市)、32/33km（大丸堰周辺)、44/45km（八高線鉄橋付近)、48/49km(福生南公園)、53/54km(羽村堰周辺)、右岸は3/4km(大師橋上流)、9/11km(中原区)、17/18km（二子橋周辺)、19/20km（高津区)、47/48km（滝ヶ原）などで利用者が際立って多いことがわかる。これらの多くは運動公園がある場所である。

2）野球人口はまだまだ多い。

サッカー人気に押されて日本の野球界は将来が危ぶまれたが、松坂大輔選手などのおかげでかなり盛り返したようだ。利用形態ごとに見ると、野球関係者が26825人と最も多く、サッカーの7566人をはるかに凌いでいる。多摩川が野球場ばかりになっては困るが、野球をする人が多いことは事実として認めざるをえない。彼らは、小雨でも猛暑でも、積雪がない限り、試合や練習をするということを今回改めて認識した。

3）増えているバーベキュー。

散策や休憩をする人と自転車で通行する人が多いのは当然のこととして、このほかには、野外料理いわゆるバーベキューをする人が6659人もいた。積雪のあった第5回目の調査日を別とすれば、これは4回分の数字である。年間を通じて数えたら相当な人数になるであろう。猛暑の7月よりも行楽シーズンの10月の方が野外料理を楽しむ人が多い傾向は予想の範囲内ではあった。

4）右岸よりも左岸の方が利用者が倍以上多い。

おそらく交通の便が良いために、左岸の方が利用者が多くいた。左岸は10万人を越え、右岸は3万7千人強であった。この違いのもう一つの原因は、交通量の多い堤防沿い自動車道路にあると思われる。これによって、多摩川と生活区域とが、物理的にも心理的にも、分断されているからである。また、河岸断崖が迫り、河川敷が左岸よりも狭いことも利用者数の違いとして表れていると言える。

5）多摩川では大規模な行事が折々開催されている。

大きなイベントが多摩川河川敷ではしばしば開かれ、そのたびに利用者数は極端に多くなる。このような催しはけっして珍しいことではなく、多摩川全域で年に何度も開かれている。

6）ホームレスの数は四季に関わりない。

多摩川の河川敷に住んでいる、通称ホームレスの戸数は、夏よりも冬の方が多いようであるが、これは夏には草丈が伸びて藪に隠れたためとも考えられ、一概に生活条件の違いとは言えない。一昨年であれば、夏の増水で冠水した地域があったの

で、その影響も考えられるが、昨年はホームレス・ホームを襲うほどの大水は出なかった。むしろ、四季に関わりなく一定数の人が河川敷に住まざるをえない状況が続いていると言うべきであろう。

7）減ったモトクロス、増えたサバイバル・ゲーマー。

モトクロスは、かつて多摩川の最大の難問であったが、ブームが去ったのか、一時期に比べるとかなり減少している。もっとも、たった1台走り回っているだけでも十分気障りである。これに対して増加傾向にあるのが、模型の機関銃や無線機を持って草むらを駆け回るサバイバル・ゲーマーたちである。多摩大橋や拝島橋右岸には休日ともなると100人ほどが集まる。彼らが放つエアガンの小さな弾が河川敷に無数に散らばり、新たなゴミ問題として浮上している。

8）カワウは秋に多い？

カワウは、秋の調査で最も多く観察された。1756羽が10月にカウントされている。左右両岸から同じ個体を数えている可能性が高いので、実数はこの半分かもしれない。

9）日本在来タンポポ健在。

4月に行ったタンポポ調査の結果を見ると、日本在来のカントウタンポポが多摩川では予想以上に健在であることがわかる。タンポポは一つの指標にすぎない。カントウタンポポの群落があるところには、ほかの日本在来の植物が残っていると期待できる。

10）ゴミの調査は難しい。

第2回目から、利用実態調査に合わせてゴミの調査もしたが、これを比較対照させて、そこから何らかの結論を導き出すのは難しいことがわかった。というのは、調査者によって廃棄物の捉え方が異なること、夏は草木が茂って調査できないこと、4月に目撃した廃棄物と7月に目撃した破棄物とが同じものか別のものかを判断するのは困難であること、などの問題あるからである。

11）その他。

忘れてならないのは、このような量的把握では捉えきれない、ごくふつうの多摩川愛好者の数である。野球やサッカーをする人は団体として存在するので数値的にも目立つが、多摩川でのんびり過ごす人はこのような調査ではうまく表現されない。今回のような量的調査とは別の調査が必要だと思われる。

もう1点重要なことは、多摩川はけっして人間だけのものではないということで

ある。多摩川には無数と言ってよい多様な生物が生活している。利用実態調査で明らかになった数字は、多摩川が大勢の人に親しまれていることだけを意味するのではなく、多摩川に生きる生物にとってこれが非常に大きな脅威になっていることをも意味する。今後、多摩川水系河川整備計画が具体的に実施される際には、これらの点についても十分留意すべきである。

(4) 『緑と清流』掲載自然観察会参加者の感想文から〔肩書きは執筆当時〕

1)「多ま川のちっちゃな春」----- 木下朋子（狛江六小3年）

ちっちゃな　ツクシンボが　頭をちょこんと出していた。
なかまも　兄弟もいないのに　いっしょうけんめい出している。
わたしは
「こんな所に　頭を出さないで　兄弟やなかまのいる　いなかに出せばいいのに。」
そしたら　つくしんぼは　こういった。
「私がここにいなくては　『多ま川に春が来たよ』といえないよ。
それに自然を作らなきゃ。」
「あっそうだった。らいねんも　たくさん　なかまをふやしてね。」

（『緑と清流』1973年3月号より）

2)「多摩川の自然」----- 川本よし江（主婦）

ことしもまた、多摩川にはツバメがやってきた。一羽、二羽……。多摩川の水面をなめるように、低く、そして素早く飛ぶ。水にぬれたつばさが、日光を浴びてまっ黒に映える。

ツバメのさっそうとした姿を見て、私はホッとします。多摩川にはやっぱり自然が残っていたのかと。工場の排水でどぶ川になっていく東京の川。小鳥や魚が姿を消していく東京の川。でも多摩川はちがう。ことしもツバメが来たのだから。

夕陽の沈む頃、魚の背びれが紅色に染まります。朝が来ると、川辺のレンゲ、スミレ、タンポポの葉っぱがみずみずしい。葉っぱにかかった露が真珠のようです。

昼には、こんな多摩川の岸辺に、近くの人びとが集まります。生活の疲れをいやそうと、ＯＬが、主婦が、工員が。私は、こんな憩いの場をいつまでも残しておきたいと思います。一度失ったら取り返しのつかない自然、小鳥や魚がいる、多摩川の自然を大切にしていこうではありませんか。　（『緑と清流』1973年5月号より）

3）「多摩川」----- 向山晴子（狛江三小５年）

雨あがりの土手を犬と散歩した。

お日さまを反射して、玉のように光っているつゆを散らした草の上を、犬たちは、クンクンとにおいをかぎながら、うれしそうに走りまわる。わたしも負けないように、犬のあとを思いきり走った。あせばむ体に川からすずしい風がふき上げて、快い。

ぐんとむねをはって、思いきり深こきゅうした。しっとりした草のにおいを包んだ空が、むねのすみずみまで広がって、心の中まで洗われたようにさわやかだ。

久しぶりの天気を喜ぶ子供達が、向う岸にも、こちらにもうれしそうに遊んでいる。

ぽっかり雲のうかんだ、洗われたようなまっ青な空をながめると、お正月にパパとたこあげをしたことが思い出される。パパは子供のようにたこあげに熱中して、「一番上手に高く上がったろう」と自まんして……。

「毎日お正月だといいね。たこあげできるもの」と子供のころをなつかしく思い出しているような顔でいった。

私が大きくなったとき、すみきった青空の下を走るたびに、多摩川を思い出しなつかしむだろう。（『緑と清流』1973年５月号より）

4）「たまがわ」----- 荒井直美（狛江六小３年）

いまのたま川は、なんてきたないのかな。「むかしのたま川は、およげるほどきれいだったのに。」と、おかあさんがいっていた。

前みたいなきれいなたま川にもどればいいのに。わたしはたま川で一度およいでみたい。できれば魚などもふえればいい。

みんながいたずらをしなければいいのに。魚の口のなかにばくちを入れて、ほればはれつして死んでしまう。そんないたずらをする人がいるなんて、頭にきてしまいそうだ。

でも、この前自ぜんかんさつ会に行って鳥がいっぱいいたのでよかった。

もしも鳥がいなかったらどうなるかしら。わたしは、死んだ空や川は見たくない。だから、みんなで川でいたずらをしなければいい。でもそんなにかんたんにはできないのだ。だから、とてもこまるのだ。（『緑と清流』1973年６月号より）

5）「たま川のおもしろさ」----- 大塚小夜子（狛江三小３年）

わたしはお正月にたま川に行きました。朝５時半に行きました。こおりがあつくはっ

ていました。こおりのところに石をぶつけると、「めりめりー」とひびがはいります。とてもおもしろいです。

6時ちかくになりました。だんだんあたたかくなりました。マラソンをして行くと、おもしろいことがいっぱいあるのです。1㎞ぐらい行くと大きなまつの木や、川の中にはたけのちいさいところや……とうとうせたがやのところまで、きてしまいました。あつくて、あつくて、3枚になりました。

ちょうど、たこが落ちていたので、たこをあげながらかえってくると、子犬がついてくるのでかくれたら、子犬はどこかに行ってしまいました。

おとうさんもやっと追いついて、おみせでコーラをのんでおいかけっこをしながらかえってきました。

狛江のたま川につくと8時でした。わたしが

「家にかえってハネつきをもってこようか」といったら、おとうさんが

「ごはんをたべてからまたこよう」といいました。ほんとうはおなかがすいていたので「うん」といいました。

ごはんを食べて来たら、もう人ごみでハネつきもできないくらいでした。だから砂場のところでしかたなくやりました。おもいどおりにはうごけません。

11時にはじめて2時におわったので、すっかりつかれて、じぶんのへやにかえってぐっすりねました。たま川があまりおもしろいので、ゆめにも出てきました。

つぎの日もたま川がおもしろいので行きました。

こおりのひびわれや、1㎞ぐらいさきにあるまつの木はおもしろい。

こんどはだれもさそわないで行きました。こんなにたま川がおもしろいとはしらなかった。もっともっとしらべれば、おもしろいことがたくさんあるとおもいました。

（『緑と清流』1974年1月号より）

6）「11月の観察会の記録」----- 無記名〔横山理子？〕

水害以後の多摩川には、今まで見られなかったものが見られる反面、今まで見られたものが見られなくなっています。

鳥の変化：1年前の観察会の時はタヒバリがたくさん見られましたが、今年は少ないようです。これからはカモなどの冬鳥が来ますので、数の変化に注意してみよう。

植物の変化：水害後一番変化したものは植物です。中州がなくなり、植物の数も減っています。しかし、これからどのようにして元の状態に戻るかは、ぜひ調べてみたい

ことだと思います。貴重な記録になりますよ！

河原の変化（地形など）：今、多摩川にはジャカゴのために、大井川などから大量の石が運ばれています。今まで狛江で見られなかったような種類の石がたくさん見られます。

水害は確かに悪夢のような出来事です。しかし、私たちは一生の間に二度と見ることのできない貴重な体験をしているのです。水害前と水害後の様子をしっかり覚えておきましょう。将来きっと役立てることができる貴重な体験なのですから、ノートにメモしておきましょう！　（『緑と清流』1974年12月号より）

7）「10月の多摩川観察会」…… 小林祐一

10月24日は雨で、観察会は31日に延期となりました。私たちは狛江の多摩川住宅に集まりましたが、そこはリーダーと参加者の小学生との間の、みにくい「アメリカセンダングサ戦争」の真っ最中でした。でも、やられたのはみんなリーダーばっかり……。ようやっとアメリカセンダングサ戦争も終わり、多摩川へ向かって歩き始めた頃にはリーダーのセーターはみんな種だらけ……。それでも、多摩川へ出る前に団地のそばでセキセイインコを見つけたり、クサギの木に実がなっているのを見たりしました。

多摩川の堤防へ上り、上流へ向かって歩いてゆきます。コサギ(白サギの仲間）やコガモが群れて飛んでいます。しばらく歩いてから、草むらの中を行くグループと水辺を歩くグループの２組に分かれて、さあ出発です。

歩いてゆくうちに、水辺へ出て、ちょっぴり水をバチャバチャさせながら進んでゆきます。すると……川の中に、石の上でしっぽをさかんに動かしている小鳥がいました。セグロセキレイです。ジジッ、ジジッと濁った声で鳴いて飛んで行きました。セグロセキレイのほかにもさっき姿を見せてくれた真っ白のコサギ、これは足の先が黄色くなっていて、きれいでした。そして、黒っぽい鳥としか見えなかったけど、コガモも群れていました。

草むらを歩いていると、ゴキヅルというおもしろい名前の、おもしろい草がありました。実のカラを割ると中に２つ小さなタネがはいっていました。

テキストには野菊のことがでていたので、いっしょうけんめい捜したけれども、ユウガギクとヨメナがあっただけで、あとは見つけられません。それでも、オナモミやアメリカセンダングサやセンダングサはたくさんあって、セーターにくっついたりしました。同じ草の種でもセーターによくくっつくのとそうでないのがあって、それは

種が良く熟れていないせいだということでした。

思いがけない場所から大きなゴイサギが飛び出したり、タカブシギやアオサギなども見て、お昼には石を投げたりもしました。お昼を食べたら、京王多摩川の駅へ向かって出発です。堤防の上でカイツブリを見たりして歩いてゆくと、いつのまにか京王線まで出てしまいました。なごりおしいけど、今日はこれで多摩川とはお別れです。

秋の日ざしをいっぱいあびた、楽しい一日でした。(『緑と清流』1976年11月号より)

8)「自然観察会に参加して」----- 大谷　力〔小学6年生〕

自然観察会に参加して2年がすぎた。はじめて観察会に参加したとき、リーダーさんに「何もつかまえたり殺したりしてはいけません。」と念を押され、ぼくはがっかりしてしまった。つまらない会だなあと思った。なぜなら、それまでのぼくは、昆虫をつかまえたり、飼育したり、標本にするのが趣味だったからだ。ところが観察会が始まってみると、リーダーさんが、思いもよらない所から、次々に鳥を見つけ、プロミナーでぼく達に観察させてくれるので、だんだん楽しくなってきた。

図鑑で知った種々の鳥達を、このような身近な場所で数多く観察できるとは、今まで思ってもいなかった。弁当を食べるころはもう楽しくて楽しくしょうがなくなっていたので、弁当を食べながら一生けん命プロミナーをのぞいた。

帰る時も、いつまでも大井の埋め立て地でプロミナーをのぞいていたいと思った。そして、その日から次の観察会が待ち遠しくなった。

何回か観察会に参加しているうちに、リーダーさんをまねて、かくにんした鳥の種名の下に赤線を引くようになり、赤線が増えるたびに感げきを味わっている。

今、ぼくの図鑑には99本の赤線が引いてある。もっともっと赤線を増やしてリーダーさんに追いつきたい。

また、自然観察会に入会する前は、全く興味のなかった植物にも、入会してから興味をもちはじめた。

都会から日ごとに自然が失われていく現在、多ま川だけでもできるだけ自然のはかいを防ぎたい。そしてもっともっと多くの種類の生物に集まってきてほしい。またもっともっと多くの人が自然に興味をもってくれればいいと思う。

最後に、リーダーさん、これからもがんばって下さい。そしてぼく達にもっともっとたくさんのことを教えて下さい。　(『緑と清流』1977年4月号より)

9）「多摩弾薬庫跡」----- 森田英代

地面が見えないほど、道いっぱいに敷きつめられたドングリや椎の実、かたわらには野菊や薬師草や山あざみの花。静かな雑木林の中には、ひっそりと大輪のリンドウが咲き、ゆるやかにどこまでも続く丘、そして山かげにはひとつ、またひとつと無気味に廃墟と化した防空壕や弾薬庫のあと、ひとけのない倉庫。コンクリート製の頑丈なトンネルの奥にはポッカリと開けたくぼ地があって、カラスウリの赤い実が2つ3つ。

11月12日の自然観察会で訪れた多摩弾薬庫あとは、秋の自然にひたるには申し分のない場所でした。

いつか来たことのあるような感じ、心の奥深くなつかしさがこみ上げてくるような感じ、でも、それがどこだったのかどうしても思い出せません。もしかすると、私たちがたびたび訪れたことのある多摩丘陵の向ヶ丘や黒川や柿生から、人家をすべて取り去って、古い雑木林におきかえたら、ここそっくりの場所になるのではないかしら。きっとそうです。なつかしい思いがしたのは秋の感傷のせいばかりではなかったのです。それにしても、東京の近くで、こんなに深みのある、やさしい自然に接することができるとは意外でした。

丘を歩きながら、戦争を体験した世代に属する私は、この場所が30数年前まで戦争の目的に使われていて、戦後、米軍がピクニックの場所として使用してきたことに深い感慨をおぼえずにはいられません。中世の城あとや、古戦場以上に戦争を連想させ、暮れてゆく秋の陽ざしのやわらかさの中からも、戦争遂行者の亡霊がさまよい出るのではないかと感じるほどでした。そして、もしも防衛庁がこの場所を、かつてつくられたときと同じ目的に使いたいと思ったとしたら……と考えると背筋が寒くなってきました。

良好な自然環境、歴史環境としてのこの場所が保存されるよう都民のひとりとして、私も努力したいと思います。　　（『緑と清流』1978年12月号より）

10）「７月の自然観察会」----- 横山理子

７月は多摩橋下流から多摩大橋まで9.6kmを歩きました。雨が心配されましたが曇りがちの日で、夏の多摩川の観察のためにはとても恵まれた一日でした。

この区間は日の出町方面から平井川と、五日市方面から秋川が多摩川に合流するために川幅がたいへん広くなります。川原には、柳やニセアカシアの林があったり、川

の中には浮き島のように中州ができていて、たいへん良い眺めです。

五日市線の下流には大きな団地があります。その近くの川原には、コマツナギ、ウツボグサ、モジズリ（ネジバナ）がいっぱい咲いていました。オオマツヨイグサもヤブカンゾウも、ノカンゾウもいっぱい咲いていました。多摩川に花がいっぱい咲いているところはそんなに多くありませんので、「花いっぱい、花いっぱい」と口の中でモゴモゴいいながら歩きました。うれしくて心もはずみました。

土手にはナワシロイチゴがまっかにうれていました。羽村で虫のいるイチゴを食べた人もいるので今度は目を皿のようにして調べてから食べました。あまずっぱい味が口の中にひろがってきました。鳥の餌をとってしまったので、心がすこしとがめました。このへんには、コジュケイやキジの鳴き声がきこえたり、ササゴイやバン、カルガモの親子、オオヨシキリ、トビなどがいました。カワセミもいるそうです。

福生市熊川では橋をかける工事がすすめられていました。その橋脚の下に湧き水がこんこんと湧き出して清流をつくっていました。少し早いけれど皆で昼食をとり、川遊びをしました。柳沢君がアユをつかみどりしました。柴田さんちの、たかねちゃんも元気に水遊びを楽しみました。多摩川の水がきれいだったら、川のいたるところで安心して水遊びができるのにな……と思いました。この辺の多摩川でも水は汚く、東京側はいやな臭いがします。

多摩川と秋川の合流点は多摩川の中でもたいへん美しい所で山の鳥も水辺の鳥も草も木も種類が多く誰でも楽しめるところですが、いまは水は汚く、水辺はゴミがベッタリとつき川原には道路・駐車場・公園ができ、草むらには自動車ですでに来た大きなゴミの山があり、たいへん荒れています。私たちは、大勢で楽しむためには、後から来る人も楽しめるようにする責任があります。そうした責任の果たせる人が自然の中で楽しむ資格のある人ではないでしょうか。だんだん不機げんになってくる昭和用水堰の近辺でした。

水の悪臭とゴミの山がすっかり気持をめいらせてしまいましたが、拝島橋の上流でキジが飛び出したり、すぐ近くの川原でササゴイをゆっくり眺めたり、カルガモが子供を連れてヨチヨチ出て来て慰めてくれましたので、いつの間にか気持も晴れていました。

また拝島橋の下流には、広い広い川原があります。去年11月に来たときには、草が枯れていて、大きな石（30㎝以上の）がごろごろしていて、どこからここにこんな石が来たのだろうか？　とたいへん不思議に思いました。７月には草が繁り、石はあま

り目立ちませんでしたが、冬はとてもすてきな川原です。

この川原にはカワラヨモギやカワラノギクの群落もあり、カワラサイコの群落はいまが花ざかりでした。また川原の半分は葦原で人をすっぽりかくしてしまう程繁っていて、私たちはその中にできた小道を伝って大草原をぬけ出しました。

八高線の鉄橋を渡ると、広々としたグラウンドがあります。このあたりは、たいへん美しい自然の中にところどころ虫喰いのように、公園や道路や駐車場やグラウンドや、不法な廃品回収業者の作業場などがあります。川や川の岸近くにこのような利用がふえると川はたちまち川らしさを失ってしまいます。

グラウンドも公園も工場も必要ですけれど、多摩川は東京に残された唯一の自然の川です。だから私たちはこの多摩川を川らしい川にするために、みんなで力を合わせ、大勢の人たちにこのことを理解してもらわなくてはならないのです。

(『緑と清流』1979年8月号より)

11)「多摩川と自然保護と」----- 市田則孝(多摩川の自然を守る会初代代表)

「身近な自然、多摩川の自然を守ろう」と、多摩川の自然を守る会がうぶ声を上げたのは昭和45年2月のことだ。多摩川と秋川が合流するあたりの川原が公園造成のブルドーザーでつぶされそうになった。ここが絶好の野鳥生息地だったことから、日本自然保護協会や日本野鳥の会のメンバーが保護を訴えて活動を開始したのである。

おりしもアメリカのニクソン大統領が年頭に環境教書を発表し、わが国の自然保護運動も大いに刺激を受けた直後である。各地で自然や生活環境を守るための市民活動が活発に展開された。そして、それらの運動が強く主張したのは、ただの草原でもそれが生活空間のなか、身近なものとしてあるがゆえに大切であるということであった。

こうして石ころだらけの川原が貴重な自然として見直されることになり、その考え方は広く流域住民の支持をも得ることができたのである。歴史的に見れば、自然保護の担い手は学術的に重要なものを保護しようという学者グループから環境を守ろうという市民層へと広がって行くのであるが、多摩川の自然を守る運動もその先端を行くものであった。

この十年間をふりかえってみたとき、日本の自然保護運動は問題提起の時代であったと言えるだろう。山岳道路の建設も干潟の埋立も、そして河川の改修も、それぞれが環境保全の立場から見直され、さまざまな指摘を受けることになった。

川原を整地して運動場や公園を造ることが発展とされていたいままでの価値観は根

底からくつがえされた。公園造成が、わずかに残った身近な自然を破壊しているという新しい理解が生まれたのだ。その上、国や都の行うことでも、みんなの声を合わせれば変えることができるという気持ちも一人一人のものになった。

そして何よりもうれしかったのは、運動を支えた人たちの心の和であった。各地で展開されたさまざまな市民運動が、あるものは分裂し開発に押し切られて消滅したものも多いなかで多摩川の自然を守る運動が十年の歴史をきざみ、それなりの成果を収められたのも、中心になった横山さんはじめ会の人びとの和ゆえと言えるだろう。

自然保護運動はたんに批判や問題提起が目的ではない。目的はそれらの問題を具体的に解決してゆくことにあるはずだ。多摩川で言うならば、目的は川原を人びとと自然とのふれあいの場にすること、多摩川サンクチュアリ・プランの実現にこそあるだろう。それが次の十年間の課題とも言える。　　（『緑と清流を』1981年２月より）

12)「６月の観察会から」----- ちゃた〔本名不詳〕

６月14日、せっかくの日曜日だというのに朝から雨。台風が近づいているとのことで、大雨にならなければいいなあと心配しつつ、高幡不動駅へ向かった。駅前では、雨のためか、いつもより小学生が少ないようであったが、それでも駅前は子どもたちの声で賑やかだった。

観察会は２つに分かれて行われた。（わたしは子供会の小学生達と同じグループとなった。）初めのうち、水田を横に見ながら歩いたが、時期的なこともあって苗がかなりあった。子どもたちの関心はもちろん、もっぱら用水路や水田の中の生きものだった。カエルやミミズを触ってみる子もいた。クララの葉をかじってみる子もいた。みんな好奇心旺盛で目が輝いていた。私がいつも観察会で見かける子どもたちのように、観察会が好きで参加している、というわけではない子どもたちが、こんなにも自然に興味を抱いていたことを知って、私としては嬉しかった。そして、いつも泥だらけで家に帰ってきて母を困らせた、自分の小さかった頃を思い出した。

土手の下の草地は自然の牧草地だった。これを動物園側がエサとして刈っていくらしい。突然異様な臭いがしてきた。子どもたちが騒ぎだした。歩いていくにつれて臭いが変わってきた。前方に衛生処理場があったのだ。ツバメが、ゴミに集まるハエを取りにやってきていた。ツバメやカラスには良い餌場になっているようだが、ゴミの問題は、私たちが今後真剣に考えるべき課題だろう。

昼頃には雨も上がった。テリハノイバラの花がしっとりと濡れている。道の真ん中

にマツヨイグサがポツンと咲いていた。赤くなった花が美しい。途中にウンカ(?)の大群がよどんでいた。どういうわけか、それが私の頭の上をついてきた。どうも彼らに好かれたらしい。相手が人間だったらいいのに……（独り身の独り言）

歩きながら耳についたのはセッカとオオヨシキリの声。この河原がいつまでも草原であるように。キジが葦原から飛び去った。

目の前に解散場所が見えてきた。時があまりに速く感じられた。リーダーからのまとめを聞く。この付近ではカワセミが見られるらしい。水がきれいな証拠だ。カモの親子が見られず残念であったが、オートバイに出会わなかったのは幸いだった。私だけかもしれないが、多摩川に会いに来ると、心に安らぎを覚える。いつまでもこの自然が残っていますように。そして7月の観察会は晴れますように！

（『緑と清流』1981年7月号より）

13)「自然観察会の感想」----- H・F〔本名不詳〕

感想といっても、私は野外観察についてはまったくの素人ですので、専門的な話などとてもできないのですが、初めて野外観察に行ってみた一人の大学生の思ったことを書いています。

まず動植物の名を知らなすぎました。今までの注意力のなさだと痛感しています。やっぱりいつも“あれは何という鳥かな”と注意していないと、なかなか数多い種類は覚えられるものではありません。もちろん東京のアスファルトの上ではその機会さえも非常に少ないと言えますが、逆に言えばせめて東京で見られる鳥や花や木の名前ぐらいは何とか覚えたいものです。これからが大変ですけど、知らなかったことがわかるようになるというのは楽しいことです。

でも名前を知らないものは、その分一生懸命、色とか鳴き声、歩き方などを観察するので、いろいろな特徴が見えてきてそれもまたおもしろいものです。観察するということは、名前を覚えるということとはちがうと思うし、とにかくよく見ることが大切だと思います。1つの花や鳥を1分でも2分でもみつめているといろいろな発見があります。名前というのは分類のためにたいへん大切なものだけど、それ自体を理解するという意味においては知らなくても決して不便ではないようにも思えます。

小学生だったころ東京でも町のかたすみにわずかに残っている草っ原に行って虫をとったり、川へ行ってザリガニをとったりすることがまだできました。夏のあそびといえばセミとりだったし、秋にはコオロギなどを追っかけました。でも先生は、君た

ちはかわいそうだ」とおっしゃって、自分の小学生時代がいかに自然にめぐまれていたかをほんとうに楽しそうに語っていました。私が年をとって子供に向かって自然を語るときはどうでしょうか。私たちが細々と虫たちを追った草っ原や空き地にはすでにアパートが立ち並んでいます。ザリガニをとった川の水はかれています。いま私たちはゲームセンターで100円玉をつみあげて機械にかじりついている子を見ることはあっても、むぎわらぼうしに虫とりあみの子をみることはまれになっています。私たちはほんの小さな草っ原のことを、それすらなくなってしまった子どもたちに向かって語るのでしょうか。そうなってしまうとしたら、さみしいことです。でもそうなるかならないかは、20歳にこの前なった私を含めた大人達の考え方、行動のしかたにかかっていると思います。

自然観察会に参加している小中学生のみなさんは本当に幸せだと思うし、えらいと思いました。自然は私たちがいつも気にとめていないとすぎにはなれていくようです。私もこの前の会をきっかけにもっと自然とつきあって遊んでやろうという気がしています。

（『緑と清流』1983年6月号より）

14）「快適な水辺空間を考える」----- 矢萩隆信

4月の自然観察会は、青梅万年橋上流の自然の河原で行いましたが、ここはすでに何度も訪れたことがあるので、よくご存知の場所だと思います。帰りには、万年橋の下流から、柳淵橋、鮎美橋を渡しました。

この日は、天気も良く大勢の人が河原で遊んでいましたが、いま多摩川の河原が自然のままで残っており、バイクが入り込まない場所は少なくなってしまいました。青梅付近の多摩川は、川に接する崖の林と、自然の河岸あるいはコンクリート化されていない岸辺なので遊ぶ人たちにも、ぬくもりのある景色となっています。しかし、川を下るとともに、そのぬくもりがなくなり、人工的な護岸河原になってしまいます。川を利用する人たちにとっては、自然のままの岸辺がなによりも有り難いはずですが、親水護岸と称する、コンクリート作りの階段・緩傾斜護岸が整備という名のもとに作られています。私たちにとっての快適な水辺空間とは、ただたんに川の水に触れるだけでなく、視野に入る、河原の風景、堤防、遠景とすべてをひっくるめたものだと思います。それを無視した、「人工的な親水地域の整備」は、私たちの心をなごませるものではありません。ましてや川崎市のように河原に芝生を張りコンクリート作りのせせらぎ公園を造るのは論外です。青梅付近のなにもない、自然の河原で、のびのび

と遊んでいる人びとを見て、その思いをいっそう強くしました。

（『緑と清流』1987年5月号より）

15)「12月の多摩川自然観察会で」----- 倭文純子

京王線聖蹟桜ヶ丘駅から数分で、わずかに残るニセアカシアの間から、多摩川の堤防に出る。堤防の上というのは、どこでも明るい感じのするものなのだろうか。ここの堤防の上は、明るい感じがして、どこまでも歩いて行ってみたい気になる。

今日は、ここから下流に向かって歩き、大栗川との合流点まで行ってみようという予定になっている。空気は冷たくても、日ざしは強く、頬に痛いくらいな日和……、のんびりと歩き始める。

堤防の上を走り過ぎる自転車も、カモたちの姿も、釣り人も、いつもより少ない気がする。自転車で走りまわっていた人たちは、今日はクリスマスの買い物に忙しいのかしら。カモたちは？　釣り人は？　川の流れが変わって、魚のいる場所なども変わったのかな？　川の流れの変わり具合などは、川を見るときに注意深く見ていれば、わかるものなのだろう。どうやら私は、川に来たときにも川を見ていないらしい。そんなことをボーッと反省(?)しながら歩いた。

出会えた鳥たちは、とても近い距離の木にモズ、空にトビ・カワウ、裸木に枯れ葉のようなムクドリの群れ、水面にユリカモメ・ウミネコ・オナガガモ・コガモ・カルガモ・ミコアイサのメス、いっせいに出たりいなくなったりするからすぐにわかるカイツブリの群れ。川の中で、セグロカモメとハシブトガラスが魚をつついているのが見えた。この顔合わせは、セグロカモメの方が強くて、カラスは遠慮がちだ。さっきまで、人の出が少ないと思っていたが、鳥を眺めに来ているらしい人びとの姿は多い。

交通公園より上流寄りに、お試しサイズのようなちょっとの長さで、緑色の自然石の護岸が作られていた。不自然な感じがした。使われている石が、川の中流では見られないような大きいものだったからなのか、それとも……？　もとのままの方が自然で、感じがよかったと思うのだが、何か必要があったのだろうか。

期待のヤマセミ、カワセミは、ウォッチャーに寄ってたかって実質的に「イジメ」られているせいか、姿を見せませんでした。　（『緑と清流』1993年1月号より）

16)「多摩川の水源をもとめて」----- 柴田順子

笠取山の多摩川の水源を求めて訪れた事は数多くあるのに、水干の祠を見たのは初

めてであった事に我ながら不思議に思う。

初めて笠取山に登ったのは十年前。横山理子さんも生きておられ、道々、病気の話をうかがい、緑がうずもれる中、清水がとうとうと流れてゆく様に横山さんの口から病状が告られた。「私はあと6年生きられるそうよ。」と聞かされた時は、一瞬、時がとまったかとさえ思った。当日、傘にコートを着て水源の前で撮った写真が横山さんの最後の山行の写真になってしまった。あれからも笠取山は不思議な山で、何度行っても飽きない山だ。── 多摩川が何度行っても楽しい所である様に ── ただ今回、残念に思った事は、いたる所に手が入った事。石ころだらけの山道、きれいなきれいなトイレ、そしてベカベカの笠取山山頂の標識には閉口した。「とうとうここまで行政の手が来たか!!」という感じであった。子どもたちにフカフカの土の感触を思う存分、体験してほしかったのに…。しかし時が、元の笠取山へ戻してくれるだろう。こんなに整備したら当分は手が入れられないだろうから…。それを期待したい。

初めて行った雁峠は、風とおりの良い峠で、こんな近くにこんな良い所があったかと思える峠でした。しかし、ここでもやはりベカベカの標識がドンと立っており、(ここでは、少し標識が傾いていた。いっそ倒れちゃえ?と思いました。) 息子はそこで写真を撮ってほしいと希望しましたが、撮れた写真は妙にベカベカの標識ばかりが目立つ写真でした。実に自然と不つりあいの標識です。

標識を見ずに山に向うと、急な山道でありながらなんと快い山だろうか? 足はかろやかに山へ向かう。── 止める声がしなければ…。しぶしぶと笠取山のお花畑へ戻りました。今年は花が少なく鮮やかさに欠けるお花畑でしたが、トンボ取りに長女は熱中し、高原の空気を満喫してきました。

帰路、次女の名前の由来でもある「シオジ」の大木を仰ぎつつ、例年より湧水の少ないヤブ沢の冷たい水を味わいました。本当にいつ行っても楽しい山です。

本年も家族全員で出席できて倖せでした。皆様、とくに会の代表には、大変お世話になりありがとうございました。3人の子どもたちは、三様に山行の事を話しています。良い体験になりました。これからも宜しくお願い致します。

(『緑と清流』1996年8月号より)

17)「7月の記録」----- 鈴木有子

夏、中流の上、福生、昭島流域の多摩川の印象は緑の塊。川の流れは、ほとんど見えないくらい、幾層にも緑が重なっている。所々、グラウンド、公園もあるが、草木

のボリュームには圧倒される。

対岸には、草花丘陵、ホトトギス、カッコウの声が響いて、気温さえ、もう少し低ければ、高原を歩く気分だ。細長い実が印象的なキササゲの黄色の花が香る。ツル植物、クズ、エビヅル、ヘクソカヅラは、コンクリートの上まで勢力を広めている。

とても、その中には入れない。土手を歩きながら、水と緑のさまざまの姿を眺めていく。対岸の緑の丘も、昭島市のゴミ処分工場に占められている。しかもそこはほとんど八王子市！　こちら側の排水は下水処理水。大量に多摩川に合流している。ここから下流の半分以上？は下水か。遠目には美しく川は流れている。

今回2箇所ほど、いわゆるワイルドフラワーとサルビアの赤花が大量に植えられた公園があった。今の季節、何もしない状態であれば、帰化植物のアカツメクサ、ヒメジョオンの花が咲いて、草原風川原風景を作っている。本来の川原なら、黄色のカワラサイコをもっと見たいところ。相変わらず、川原に園芸種を持ち込む管理が続いている。駅までの道はモノレール工事〔立川駅までの多摩モノレールのこと〕。

（『緑と清流』1998年7月号より）

(5) 大人になった目で見た多摩川

(a) 三池奈奈-----「イメージという財産」

私は多摩川のまさに目の前に住んでいる。その証拠に、うちより先に家がない。とにかく家を出て土手を登ればそこには緑の河川敷が広がっている。だから子どもの頃の遊び場はもっぱら河川敷の公園だった。私の家はマンションで、ベランダから公園を見下ろす形になっているので、そこを「下（した）の公園」と呼んでいた。

下の公園には動物の形をした、子どもが上ったり遊びに使える石像や、鉄棒、ブランコなどがあり、私たちはいつもそこで駆け回って遊んだ。舗装されてない場所には草が生えているか、ただの土だ。草むらには、春になるとシロツメクサ、オオイヌノフグリ、タンポポ、他にも色々な花が生える。小さい頃はよく父親が、花や鳥の名前を私と妹に教えてくれた。多摩川にはカモメや、カルガモ、ムクドリ、セグロセキレイなどが居た気がする。

所々にある垣根も、子どもの私にとっては特別なものに思えた。濃い緑色の垣根の中には、別の世界が広がっていて、妖精が静かに暮らしているんじゃないか、本気でそんな想像をしていた。今では考えられないほど、あの頃は見るもの全てから空想の世界が広がり、現実で目にする以上のものを、見ることができていたように思う。

東京に住んでいながら、これだけの自然と触れ合ってきたのは幸福なことだと思う。確かに大きな山や森はないが、蝶もトンボもバッタもいるし、魚はよく跳ねるし、秋にはススキが生えて鈴虫が鳴く。雪が降れば、土手でソリ遊びをして、カマクラを作った。変化する季節を感じながら、季節の遊びも覚えた。「東京は季節を感じられない街だ」なんて言う人は、多摩川に来てみるといい。ここに来れば、ちゃんと季節の匂いがする。

今日、この文章を書くために、本当に久しぶりに川原に行ってみた。高校も多摩川の近くだったので、多摩川線沼部駅の川原ではよくダンボールを敷いて飲み会をやったりしていたのだが、うちの下の公園で遊んでいたのは小学校5年くらいまでで、中学、高校のころは1、2回散歩したような気もするがほとんど足を運んでいない。ということは約10年ぶりに下の公園を歩いたことになる。

11月始めの風は肌に心地よい温度だった。赤い空に浮かんだうろこ雲が、橋の向こうまで輝いていた。

土手から見る世界は広かった。

私は、石の階段を転びそうになりながら降り、少しぬかるんだ土の上を歩いた。「ブーツが似合わないな」と思った。

川原を歩き出すと、すぐに違和感を覚えた。全てが小さいのだ。身体の小さい私でも、10年のブランクは大きいらしい。土手から川までの幅も、テトラポットも、コンクリートの道のでこぼこも、子どもの頃のサイズではなかった。

公園にある動物の石像ももちろんそうだった。ベンチも、鉄棒も、ブランコも、何もかも。それから、濃い緑色だったはずの垣根は、枯れて貧相に枝をむき出していた。この垣根は冬でもしっかりと葉をつけていたのに、どうしてこんな姿になってしまったのだろう。なんだか淋しかった。公園の隅々も、ゴミがあって汚かった。この間の増水の痕だろうか。子どものころ、ゴミがあったかはあまり覚えていない。5月30日、ゴミゼロの日に、ゴミ拾いのボランティアに参加した記憶があるからゴミはあったのだろう。その頃は関心がなかったのかもしれない。

川べりは、昔よりも緑が茂っているように思えたが、記憶は定かではない。昔もこのくらいだったのかもしれない。しかしなんだか、ただぼうぼうと生えて、手入れなどされていないように見えた。向こう岸を見ても、やはり川の距離が縮まったように思える。そんなに長いこと、ここに来てなかったんだなあと、改めて思った。

公園を歩いているのは、犬を連れたおじさんだけだった。子どもは遊んでいない。

最近はスケボー少年の練習場と化していることも多いようだが、今日は彼らもいない。子どもを見かけないのは、少子化のせいだろうか。それとも、子どもが居る時間に私がここに来ないからだろうか。それにしても、動物の像は色あせているし、人はいないし、子どもの頃の方がこの公園は輝いていた気がする。そう感じるのも、昔見えていた何かが見えなくなってしまったせいなのだろうか。

帰ろうと思い、川べりを歩いていてすごいことに気が付いた。川の淵に生えている木が大きくなっているのだ。一本だけではない。昔、細々と淵にしがみつくように生えていた木々が、しっかりと太い、大きい枝を伸ばしている。たしか、この木のどれかの根元に、死んでしまった金魚を埋めた気もする。全てが小さくなったこの川原で、何という木かわからないが、この木々だけが立派に成長していた。なぜか、とてもとても嬉しかった。

いつの頃から、こんなに硬い頭になってしまったのかはわからない。あの頃、雲の形や、水面の輝き、草の匂い、遠くを走る電車の光、その全てからあらゆるイメージを膨らませることができた。今は、現実はただ現実としてしか目に映らない。でも、こどもの頃イメージしたものは、私の中に残っている。それは、多摩川が私に与えてくれた財産だと思うのだ。

今はほとんど窓から見下ろすこともなくなってしまった川原だが、私にとってのふるさとは、やっぱりここしかない。どんなに他の美しい川を見ても、多摩川の輝きに勝る川はないと、これからも私は思うだろう。　(2001年11月筆)

(b)　林　陽一 -----「多摩川について考えること」

狛江に越して来て15年目になるが、１年間だけ実家を離れて京都の嵐山の近くに住んだことがある。近くには保津川下りで有名な桂川が流れ、また大学のそばには京都で最も有名な川である鴨川があり、何度も訪れた。平地の町に住むとき、川というのは最も身近な自然の代表となる。そして、川の表情というのは場所によって大きく違うということがはっきりとわかった。

私が多摩川自然観察会に参加していたのは、主に小学生ぐらいで、その後は自然の観察のために多摩川にいったことはない。しかし、交通や花火見物などで多摩川に出ることは少なくなかったと思う。他の川や同じ川でも見慣れない場所にいったとき、はじめて自分がいつも見ている川と違うという、何か落ち着かないような違和感を感じる。自分の中での川というものに対するイメージは狛江で見る多摩川なのだ。

それほど広すぎもせず、狭すぎもせず流れてるんだか流れてないだかくらいのスピードで流れる多摩川。春には花見の人が集まり、夏にはバーベキューや花火をする人が集まる。散歩する人も、釣りをする人も、走る人も自転車も。とにかくいつも多くの人を集めるのが特徴だろうか。それぞれ求めているものは違うだろうが、誰もが良い場所だと思える多摩川。もちろん自然観察に来る人も少なくないだろう。私も、鳥がいれば知っている鳥だろうかと追いかけるし、上流の川にいったらとりあえず石はひっくり返す。小学生のときの観察会の記憶としては、鳥や植物にはあまり興味がなく水棲昆虫には多少興味があったと思う。ただ名前を覚えようという気があまりなかったことには、今考えると少しもったいないことをしたか、とも思う。

今年から大学院に進学し、環境社会学、環境倫理学という、人間社会あるいは人間自身と自然環境とのかかわりのあり方について考えたいと思う一因として、多摩川の存在を挙げることができる。今すぐ直接的な保護運動や、観察会に加わらない理由はよくわからないが、今はできるだけ普遍的な視点から環境問題に対して取り組んでいきたいと思っている。

私にとって、最近多摩川に関わる出来事は、なんだか随分と自然との関係よりも、人間同士の関係の印象が強い。川のあちこちの情景といろんな人が同時に思い浮かぶ。いい思い出だったり、もうあんまり行きたくない場所だったり。とにかく多摩川は私にとって大切な場所である。　(2002年3月筆)

(c)　矢島邦子……「キミは多摩川の橋の下で拾われたんだよ??」

私は多摩川の土手沿いの家に住んでいた。その前にも住んでいた家があるのだが、ほとんど記憶にない。ので、この土手の家が私の最初の家である。お散歩行こうってことで土手を上がり、遊びに行こうってことで土手に上がり、花火大会も、お花見も多摩川で。

けれど私には、お花見をした覚えはない。お花見をする予定だった日のことは覚えている。なんでだったか、家族がお花見の道具？の準備をしているとき、私は先に多摩川に行っていた。家の近くを離れないつもりだった。最初は。多摩川で遊んでいるとき、これから川へ行く少年（トム・ソーヤと名乗っていたと信じている。）に会った。話をした。ついて行った。けれどそのコはかなり年上で、私は途中で置いてけぼりとなった。しばらく消波ブロックに座っていたけれど、やっぱりなんだか寂しくなって、わあわあと泣き出してしまった。そいで近くにいたおばさんが駆けつけてくれて、

家に帰ることができた。そして思い出した。「お花見の予定だったじゃん！」

それから……。たぶん定期的に多摩川は草刈りをされていた。そこらじゅうにあった緑色がなくなり、カラスノエンドウもタンポポもなくなり、清少納言の言葉を借りれば、「さもわろし」みたいなことになる。私はこれが好きではなかった。今でもやってるのかな、コレ。

つくしのおひたしが食べたい。と、春が来るたび思う。きっとこれからも。去年はあっちのほうにつくしがたくさんあったとか、セリもあるだろうとか。なんか、私は花や草の名前ってよくわからないな。「あ！　これはこの前の……！」てのはあるケドも。虫もそうだね。

今はたまに、多摩川の土手を二子玉のほうに歩くことがある。春先の暖かい日に。途中、スカンポを吸いながら。（でもこれをやってると、道行く人々にヘンな目で見られちゃうよ！）疲れたら休むし。で、駅についたら電車で帰る。個人的イベント？かな。

うーむ、引っ越すとこういうイベントもなくなるんだよなー。さみしい。でもまた来ればいいんだし。ね。

ではでは。　　（2002年３月筆）

(d)　柴田隆行-----「多摩川とぼく」

ぼくの生まれは東京都世田谷区尾山台。となりは田園調布と上野毛といった高級住宅街だが、尾山台は庶民の町、そして大学町でもある。大学とは武蔵工業大学で、通称ムサコウ、ぼくらにとっては「オンボロ車を走らせている自動車部」「かけそば５円の学食」「映画が見られる学祭」といったところだ。この武蔵工大のまわりがぜんぶ遊水池というか沼だった。水深30～50cmくらいで、いかだを浮かべたりエビ釣りをしたりカエルをとったりする所、とくにギンヤンマの取れる秘境でもあって、少年時代の主要な遊び場だった。

その前にある堤防を越せば多摩川で、よく泳ぎにいった。夏には警察の監視所も特設され、手軽な水浴場として大勢の人が楽しんだ。日曜日には父と朝から晩まで釣り糸を垂れ、瀬ではハヤやヤマベ、淵ではコイやマルタ、浅瀬ではクチボソ（オイカワ）、用水の出口ではフナやヤツメウナギ、そして帰路たんぼの畦でドジョウをつかんだ。川は左岸側に浅い流れがあって、中州をはさんで右岸側に深くて急流の本流があったので、ぼくらはたいてい浅瀬で遊び、本流へは父に手をとってもらって泳いでいった。

いまは中州がつぶされて、深くて急な本線だけになったから、子どもでなくても恐くて水辺に近づけない。

ぼくらは戦後ベビーブームの世代で、学校は二部制つまり授業を午前と午後に分けて交代で通った。そんなことが2年つづいて分校ができ、桜並木（今の環状8号線）から多摩川寄りに住むぼくたちはこの分校へ移った。小学校2年の時で、3年の姉は本校に残ったので、分校はぼくら新3年生が約50人、2年生が40人、1年生が50人で全部だった。年々繰り上がるのでぼくらが第一回卒業生となった。校庭はもと畑だったから、夏には雑草が背丈以上にのびて、夏休みに皆で草刈りをした。中にはトウモロコシやジャガイモなどあって、密かな楽しみだった。そんな学校だから、理科や写生の授業はすぐそばの多摩川でやった。女の先生は昼休みになると、窓から遠くに見える富士山の絵をいつも描いていた。学校への行き帰りには、竹藪の間の道を通ったから、ウズラがひなを連れてちょこちょこと歩いているのをよく見かけたし、湧き水の出る家の玄関口ではサワガニをつかまえたりした。先に述べた遊水池のいくつかは埋められて温室がつくられ、その頃の社会科の教科書に温室村として紹介されていた(温室村は以前からあったが)。そんなこともあってか、ときどき都心の小学生が遠足に来て、ぼくらの学校にトイレを借りに来ていたが、その子たちの垢抜けた態度を、都会の田舎たるぼくらはただ口を開けてなかばうらやましそうに眺めた。もちろんこんな所に遠足に来るなんてかわいそうにと、強がりとも同情ともつかぬ複雑なため息をもらしてもいた。

でも都会化の波は徐々に押し寄せ、まず桜並木が切られることになった。大きな桜の木がトンネルをつくって何キロも続いていたが、車が増えてついに切られた。つづいて遊水池が少しずつ埋め立てられ、たんぼも宅地に変わった。多摩川の水も汚くなり始めて、東京オリンピックの頃には上流の砧までいって泳いだ。砧には浄水場があって、川底から水を取っていたので砂利の手入れが行き届いて水が澄んでいたのだ。しかし深くて急だったから危険でもあった。中学生になっていたぼくらは夏には雨の日にも出かけていった。

その頃の想い出を一つ。当時子どもはヘリコプターが飛んでいると手を振る癖があったが（というのはたぶん、その頃ヘリコプターからチラシやおもちゃのパラシュートをまくことが多かったから)、ある雨の日に2～3人で砧に泳ぎに行ったときヘリコプターが飛んできた。そこでさっそくいつものように何気なく手を振ったら、ヘリコプターがぐるっと旋回してからぼくらのいる川辺に降りてきた。びっくりしたのはぼ

くらの方で、慌てて茂みの中へ逃げ込んだ。あとから思えば、ヘリコプターの方は雨の多摩川で子どもが裸でさかんに手を振っているのだから遭難かと思ったのだろう。それ以来ぼくらは二度とヘリコプターに向かって手を振らなくなった。

そんなこんなの多摩川とのつきあいも、年齢が上がるにつれて変わり、高校時代はもっぱらマラソンの練習に通った。走るのが遅いぼくは体育会が苦手だったが、ひとり一種目出ればよかったので、短距離は避けて長距離を選んだら意外と頑張れたので気をよくして多摩川に走りに行ったのだった。

大学入学と同時に大学闘争が幕開けとなり、毎日朝から晩まで大学にいるかデモに行くかの生活で多摩川からしばらく遠ざかった。ぼくが多摩川に戻ったのは南アルプス・スーパー林道反対闘争に参加してからだ。まず足元の自然から、と、わがふるさと多摩川に目を向けもどしたときたまたま横山理子『多摩川の自然を守る』に出会い、ついうっかり横山さんに電話をかけたのが運のつき、以来多摩川とは離れられない運命となった。でも、思えば、小学校の卒業文集に「多摩川をもっときれいにしたい」と書き、それまで何もしなかった罪滅ぼし。今後も多摩川と運命をともにして行きたいと、いまは思っている。　　（『緑と清流』1986年3月号より）

(e)　矢萩隆信-----「多摩川での遊び」

私は、目黒で生まれ、2歳の頃に現在住んでいる世田谷区に引っ越してきた。もちろんその頃の生地や引っ越しのことなどは覚えているはずもない。ただ、近所の同年代の子どもたちと遊びまわった場所は川や農業用水路が多かったと記憶している。

私が屋外へ出て遊びだした頃は、まだ家の周りには田畑が多くあり、そこには農業用水が流れ、その用水でドジョウ捕りや魚捕りなどをしていた。この農業用水は、我が家の前を流れていた蛇崩川から取り入れていた。

蛇崩川で遊びだしたのは小学校に入ってからの短い期間であった。それは、この川の自然護岸は急で幼い子どもにはなかなか近づけなかったからである。しかし、一度コツを覚えれば川に降りることも容易で、今までの遊び場所にはない魅力ある場所になった。ここには、農業用水にはいない魚やアメリカザリガニがたくさんいて、これを捕らえたり水遊びをして遊んでいた。

蛇崩川は浅く、泳ぐということはできなかったが、それでも夏休みなどは毎日、半ズボンにランニングシャツ姿で川の中で遊びまわっていた。しかし、この川の上流にも町工場ができ、汚水が流れたり、台風で護岸が崩れコンクリート護岸になったりし

たため、遊び場として使えなくなってしまった。もちろんその頃には家の周りの田畑も姿を消し、農業用水もなくなってしまった。

その次に川遊びの場所として利用したのが多摩川である。多摩川にはヨチヨチ歩きの頃から、二子玉川兵庫島を中心に行楽地として訪れている。この辺りのことは、『多摩川'84』（とうきゅう環境浄化財団）の「兵庫島あたりのこと」に記したが、私が初めて多摩川に接したのは兵庫島付近である。

兵庫島付近は現在の姿と異なり、水量も豊富で、今は悪臭を発する水たまりにも魚影は濃く、魚取りや泥遊びに興じた。その頃の私の活動圏は兵庫島を中心に、読売飛行場の上流から等々力渓谷付近であった。

読売飛行場付近（現在は世田谷区の公園）には広大なアシ原があり、鳥の巣などはたくさんみつけることができた。この鳥の巣をねらう蛇なども生活していた。等々力渓谷には、サワガニもいたように思うが、ザリガニだったのかもしれない〔サワガニもたくさんいた ── 編〕。

このような遊び場としての多摩川が、その姿を変えていったのはアッというまであった。もちろん、私も毎日多摩川で遊んでいたわけではないので詳しくはわからないが、多摩川を訪れるたびにその姿が変わっていくことに驚きを覚えた。はっきりいえば、小学校の高学年になった私は、他の子どもたちがそうであるように、スポーツに明け暮れる毎日であり、河川敷にグランドができるのを喜んでいた。それでも小学校4～5年生の頃までは、よく多摩川で遊んでいた。

中学2年生頃に、遠足で多摩川に行った。その頃「歩く遠足」というのがちょっとしたブームであり、私の通う名門××中学でも学校から歩いて砧本村の多摩川べりまで歩いていった。その時には、まだアシ原が残っていたが、すぐ下流ではグランドの造成工事が始まっていたように記憶する。この頃から河川敷にグランドを造成することがさかんに行われるようになった。それは、東京オリンピックで金メダルを取れなかったのはスポーツ施設が不足しているからだ！　施設を増やせ！　という声に押されて、河川敷をスポーツ施設に開放した結果であった。

小学校の5～6年生の頃には、母の知人が横山さんのお宅の近くに住んでいたので、その家をちょくちょく訪れ、そこの子どもたちと狛江付近の多摩川で遊んだ。ある日、五本松付近の水辺でザリガニを捕ったり、泥遊びをしていて足をすべらせ、倒れそうになった。そのときすぐわきにあった木の枝をつかみ、あやうく何を逃れたが、手の感触が変なので木の枝を見ると、なんと枝に巻きついていたアオダイショウをつかん

でいたのだ。そのアオダイショウも驚いたらしく、口をクワァッとあけこちらをにらんでいた。私は恐ろしくなり、ワァーと声をあげ逃げ出した。しかし、母の知人の子どもは、家に空きビンを取りに帰り、その空きビンにアオダイショウをつめこんできた。そして、こともあろうにすっかりおびえている私にそのビンを近づけてくるのだ。それ以来私はヘビが嫌いになった。

もう一つ恐ろしい体験をしたのは、宿河原堰の上をその子どもたちと歩いて渡っていた時に、なぜか足をすべらせ川に落ちたことだ。幼い私は川の水をたっぷり飲みおぼれてしまった。幸い近くにいた大人が飛び込み助けてくれたのだが、たっぷりと川の水を飲んだ私はゴホゴホとむせながら泣きじゃくっていた。それ以来私は多摩川にどっぷりつかるはめになった。　　(『緑と清流』1986年3月号より)

(f) 柴田秀久-----「ぼくの多摩川」

1960年代、つまり小学生の頃、多摩川で記憶に残っていることは、親父に連れられて行った投網打ちと、よく飛ばしたグライダーだった。

ぼくが小学生の頃、その当時の多摩川は、まだ水量があり、深みにはまると肩まで水に浸かった。そのため、兄と3人で多摩川へ行き、親父たちのかきわけた水面が口元まで押し寄せてきてむせびながらも必死で後を追いかけたのをいまも憶えている。また、はだしで川へ入っていったため、どろのあたりに来ると、ぬるとした、なんとも言えない変な感じとヒルが足のまわりに寄ってきたのもまだ憶えている。

投網を投げるにはコツと体力を必要とした。子どもだったぼくは親父の真似をして投網を投げたが、開かずに、しかも投網の重さに振り回され川の中へ引きずり込まれた。魚の代わりにヒトが釣れたわけだ！

その時掛かった魚には、親父達がよく口癖で言っていたガンガラが主体で、アユはめったに掛からなかった。ガンガラとはオイカワのことで、オスがメスを引きつけるため初夏きれいな色に変わる。それでも投網を数回打つとバケツに一杯ガンガラが捕れた。そして今日でも同じように、網に掛かった魚を捕ろうとすると、子どもたちがおこぼれにあずかろうとやってきた。文字通り「漁夫の利」だった。釣った魚は親父と近所の人が食べた。いまのところ水俣病などの病気にかかった人はいないから、当時はさほど魚も汚染されていなかったのだろう。

グライダーは日曜日に練習が行われていた。グライダーを引っ張ってから途中で離すワイヤーの動きがおもしろく、よく友だちと川へ見に出かけた。落下途中でヒュー

ンというワイヤーの風切り音が聞こえたのが、まだ脳裏に焼き付いている。

ぼくを育んでくれた二子あたりの多摩川は、中学生のとき埋め立てられ、川幅も狭くなり、滑走路やススキ原はグラウンドに変わった。でもこの場であの人と巡り会わなかったら、今日のぼくはなかったかもしれない。高校2年の秋、二子で野鳥を見ていたら、上流の方からプロミナーをかついだ太った人とヒョロッとしたやせた人と出会い、呼び止められた。いろいろと野鳥の話などをしたあと、「多摩川で自然観察会をやっている。今度来てみないか」と、太った人に言われた。この太った人が三浦さんで、もう一人の対照的な人は畠山さんだった。この一言がきっかけで、自然観察会に行くようになった。そして、自然観察会で、「リーダーになったら」という代表の鶴の一声でリーダーに。これらの一言で、延々、14年間も泥沼にはまったままです。高校の授業で多摩川の自然を守る会が紹介され、いいなと思ったが、まさかこんな形で入るとは夢にも思わなかった。　　（『緑と清流』1986年3月号より）

(g) 篠　清治-----「おもいでの中の多摩川 ── 私のふるさと」

私が今も住んでいる狛江の多摩川べり（北多摩郡狛江町和泉）に住みはじめたのが、昭和34年生まれの私が小学校に上がる少し前の昭和40年です。その後、小学校3年～5年の頭にかけて、秋田県に行っていました。その前か後か、定かにおぼえていないことも多く、いつごろ、何年にどうだったというのは気にかけずに生きてきたし、小さいときの記憶は人並み以下以下、の私ですから、それぞれの場所でどうだったか、それがどうかわっていったか、という内容にします。

越してくる前にも、一つか二つのときから、この場所にはよく遊びに来ていましたが、他のリーダーとちがって、30年代の多摩川が中心というわけにはいきません。海パン（フンドシではない）はいて水浴びしたのも一度くらい（まだ水泳とまでいかなかった）だし、“林間学校”（後出）もすでに閉鎖されていました。ただ、たぶん東京オリンピックの歳の大渇水は記憶にあり、ガキの私でも川をわたれるくらいだったこと、〔宿河原〕堰下の本流が地層の中の池のようになって、水がなまぬるく魚がういていて、このときはじめてニゴイを見たことをおぼえています。

〔調布日活前の河原：〕小学校高学年～中学くらいに、自転車で行った。モトクロスのコースを走ったり、また、河原は野草の宝庫だった。マツムシの声がうるさいほど。→モトクロス栄えて自然は細り、ごぞんじ多摩リバーサイドゴルフ場でまったくの今は昔となった〔その後われわれの反対運動により廃止〕。

〔多摩川住宅前の水辺：〕深いわき水があった。あたりの河原は、アシ原・オギ原が広がり、川の流路跡らしきくぼ地に沼が点在しておもしろかった。沼地状の複雑な地形は子どもの遊び場。〔水際の〕池はしだいに埋まったが、〔奥の池の〕一部は残っていた。が、つい最近（たしか昨冬）につぶされ、コンクリート護岸になった。

〔五本松下流：〕家の前で、よく遊んだ。水制のわくの丸太を踏むとガッタンともぐり、はなすとゴットンと浮き上がるのをたのしんだり、水制から水制へとびうつったり、また、水が干上がると、水制の下から魚をかき出してとったりした。今よりも水は多く、泥は少なくて、よく石の下に手を入れて魚をつかまえた。何といっても、コオニヤンマの大きな平べったいヤゴがいたのが今とのちがい。

〔クチボソ（モツゴ）、ヨシノボリ、カダヤシ、タイコウチなどの他に、〕多摩川の生き物たちの思いでというと、よくいたのはドジョウ、小ブナ、ダボハゼ（ツチフキ）、アメリカザリガニ、ウシガエルの大きいオタマなどで、スジエビ、小さなエビ、などもいた。ヤマベ（オイカワ）はあまりとれず、とっても持ちかえるときにゆらすとすぐに死んでしまった。クチボソの卵もよくあって、石や空きカンについていた。（弾力のある手ざわり。）

釣りは、父親につれられて少しはしたが、性に合わなかったのか、もっぱら半ズボンで水に入っての手づかみだった。えものはクチボソが多かったが、魚はヌメヌメとすべって意外に力強くて、とり逃すことも多かった。また、大雨のあとにはアミをもって魚をとりに行ったものだ。

家の前の小段はじゃり道で、よくダンプが残土を捨てていった。残土の山の中には、粘土や軽石があった。また、このあたりはトノサマバッタが多かった。その後、左岸道路反対の舞台となった。今は時間規制の舗装道路。

土手の上は、砕石じゃりがしかれる前には、水たまりができて、ゲンゴロウやミジンコなど、いろいろいた。

〔西河原公園：梨園があった。崖線の雑木林の手前に、〕新宿区だかの林間学校のたて物があった。前庭に大きなヒマラヤ杉があって、門には表札が残っていた（と思う）。洗い場に消毒液の空きビンが散乱、一度建物の中に入ったら、台所にお皿が残されていて、ビンの中には梅干しが入ったままだった。その後、火事で焼け、跡に建ったのが、今の福祉会館。

〈水道局!!〉水道局の池がなくなったのが、堤内地で一番の変化。家のとなりにあった池は、よく塀をのりこえて（だと思った）遊びに行った。池の底とまわりは、こぶ

し大くらいの河原石で、水はきれいで、オオカナダモが茂っていた。木片をうかべて石をぶつけて遊んだりもしたが、はだしで水の中を歩く感触がよかった。埋める前、水が落とされ、たくさんのフナや大きなナマズが水上げされ、フナをもらってきて食べたが、後でナマズがおいしいと知って、少し惜しかったと家族のだれもが思った。今は水道局資材置き場で、さらに一部に職員アパートがたてられた。〔その隣の池は、この池と〕パイプでつながっていたが、こちらは岸が泥で、アシが生えていた。秋田へ行っている間に埋められたのか、記憶にない。いまは資材置き場。〔土手に近いほうの池は〕マミズクラゲの発生地として有名な池だった。池の岸が急で、カメを見たりギンヤンマがいたことくらいしか憶えていない。また、池のとなりにはバラ園があった。今は埋め立てられ、狛江高校になっている。埋め立て後、しばらく放置され、水がたまって池ができて、まわりにもいろいろな植物が生えてきて、おもしろいのでよく行った。チドリも住んでいた。ギンヤンマ、カイエビの仲間、イヌゴマ群落の花、ヤマハンノキなどなど。

〔宿河原堰下の多摩川：〕いわゆる三紀層が波形の地形をつくり、化石もいっぱい入っていた。また、蛇かごの護岸の下から水がわいて、きれいな緑のコケが生えたり、トビケラやゲンゴロウがいた。また、この方面の土手や河原にマツムシがとても多く、小田急下にはクツワムシがいたが、今は一匹もいない。ナデシコもなくなった。

最後に、やっぱり昔はよかった。

（編者注……原文には地図が付けられ、文章の一部が地図の解説となっているが、ここでは地図を割愛したため、編者により一部補足した。〔 〕内がそれである。）

（『緑と清流』1986年3月号より）

(6) 総　括

多摩川の自然を守る会は、冒頭に記したように、自然研究者や自然愛好家と多摩川沿いの住民とが一緒になって活動を始めた点にその独自性があった。いまでも基本的な立場はそこにおかれている。

多摩川の自然を守る会の特徴を最も典型的な仕方で体現したのが、会の前代表である横山理子さん（故人）だった。横山さんは、自分の目や身体で確かめることの大切さを繰り返し強調された。横山理子さんは、かつて教職についていたことがあるとは言え、自然についても河川工学的なことについてもなんら専門的な知識を持たない、ごくふつうの家庭の主婦であり、市民である。その主婦が、毎日の生活のなかで多摩川やその自

然について実感していることがらが、建設省（当時）や東京都、流域自治体などの行政マンには欠けている部分だった。行政や河川工学や自然科学についてまったくの素人である横山さんの発言の強さの秘密は、〈事実どうであるか〉を自分の目で確かめるという、ただその一点にあった。その単純なことが、少なくとも当時の行政マンには、そして若いリーダーである私たちにも、欠けていた。もちろん、〈自分の目で〉という方法は、つねに正しいとはかぎらないし、視野も狭くなりがちである。しかし、まずは〈多摩川の現場を歩き、見て、考える〉という基本姿勢がなければ、多摩川の自然を破壊から守ることはできない。じじつ時間の許すかぎり多摩川の現地を歩き続けてみると、たんに破壊から自然を守るという直接的な対応だけが求められるだけではなく、むしろ多摩川にはまだまだ豊かな自然がたくさん残っていることがわかり、多摩川を源流から河口まで、また堤防のうちもそとも、一体として考える必要が明らかになった。こうして、身近な自然の大切さを肌で知り、またそれを人びとに伝え、あるいは訴え、あくまでも生活のなかでの自然の価値を守ろうとした、横山さんを中心とした多摩川の自然を守る会の活動は、日本における自然保護運動の新しい時代の幕開けとなったのである。

かつては選挙目当ての議員がその場で思い付いたような開発構想や、実際に多摩川を歩いたことのない市民が、たとえ善意によるものであれ、鉄橋を渡る電車の窓から眺めて思い付いたような根拠のないプランもしばしば議会提案されたりした。グラウンドや人工的な公園が造られていない河川敷は「荒れ地」と呼ばれ、その「有効利用」とやらが議会で叫ばれた。上流から河口まで堤防上をサイクリングロードにしようとか、河川敷すべてを公園化して日本一長い公園を造ろうというようなことが、すばらしい夢であるかのように語られた。しかし、その後ますます都市化が進み、自然が減少するなかで、私たちの地道な継続的活動が社会的に認められるようになった。多摩川では、行政と市民との度重なる話し合いや現地視察を経て、1980年に「多摩川河川環境管理計画」が全国に先駆けて作られ、また2001年には「多摩川水系河川整備計画」が作られて、多摩川の河川環境を維持し改善するための処置がとられるようになった。これらいずれの計画も、その立案・検討にあたって最も重要視されたのが〈多摩川の現場を歩き、見て、考える〉という姿勢であった。市民と地方自治体や国の職員が一緒に多摩川を歩き、現状を把握し、話し合いを重ねた。

なかでも重要なのが流域住民の意見だと思われる。というのも、住民は、行政職員のような異動がめったになく、多摩川を継続して見ているからである。しかし、多摩川の近くに住んでいれば誰でも多摩川について一定の見識を有しているかといえば、それは

また疑問である。それなりに多摩川を〈見る〉目が必要だからである。ここに、定期的に行われる自然観察会のような行事が必要とされるゆえんがある。参加者がそれぞれの特技を生かしてたがいに教え合い学び合う場となる現地視察会や自然観察会は、自然を見る〈目〉を養う絶好の機会である。そしてこれを継続させれば、そこで得た知識は貴重な財産となって蓄積される。その一例として、多摩川の自然を守る会の30年の観察記録がある。(その詳しいデータは、2002年2月に公刊した記録集をご覧いただきたい。)

最後に、自然観の変遷ということについて触れておきたい。1972年より発行を続けている多摩川の自然を守る会の機関紙『緑と清流』には、毎月開かれる多摩川自然観察会の参加者による感想文が掲載されている。さきにその一部を紹介したが、これらの感想文を読むと、そこに一定の傾向性があるように思われる。すなわち、

① 自然観察会や自然保護運動のリーダーたちは、子ども時代に多摩川の豊かな自然を満喫した想い出を持つ。そして、それが動機となって、少なくとも自分がかつて楽しんだ程度の自然を多摩川に取り戻したいと考えている。つまり、彼らの自然観の元は彼らの子ども時代の実体験に求められる。

② 1970年代から80年代にかけて、公害や自然保護の問題が全国的に深刻化し、社会問題となって、人びとの意識のなかに強く刻印づけられた。それは子どもたちや主婦の感想文にも反映されており、とにかく自然は大切にしなければならないというような意識が、実体験よりもやや先行したように思われる。

③ 90年代に入ると、多摩川の自然の現状をまずはそのまま受けとめるという落ち着いた姿勢がうかがえる。それは或る意味では、自然を守るという激しい情熱が若干冷めたことをも意味するが、もはやこれ以上なくすわけには行かないという決意もうかがえる。そのために多摩川の自然をきちんと記録しておこうとの意欲が見られる。もちろん、感想文の筆者や観察記録記者がやや固定化して、彼らが継続的活動により観察眼を鋭くしたという要素も考慮する必要がある。

④ 多摩川での自然保護運動が盛んに行われている時代に生まれ、多摩川自然観察会に参加したことのある子どもたちが、いま青少年になって多摩川についてどのような気持ちを抱いているかについて、わずか3名ながらインタビューを行い、作文を寄せてもらった。それを読むと、かつて70年代に見られた子どもや青少年の作文とはかなり雰囲気が異なるように思われる。一言でいえば、多摩川に対してクールである。ただし、ここで言うクールとは冷淡・冷ややかという意味ではない。「愛してる」なんてわざわざ言わせないで、というような、いわば身体に染み込んだ多摩

川への愛がある。大人たちはかつての多摩川への郷愁や自然保護意識をもって多摩川に触れようとしているが、彼らにはそのような多摩川への思い入れがない。自然が失われつつあっても川が汚れていても、それが自分たちの生まれ育った多摩川であり、そこで自分たちはいままで生きてきたのであり、それ以上でも以下でもない。このように彼らは考えているのではないかと推測される。

さて、この度、とうきゅう環境浄化財団より2年間にわたり、研究助成金をいただくことができ、私たちはたいへん感謝している。この助成により、長年の懸案であった、30年間に及ぶ自然観察会の記録の整理と電子データ化、そしてその公刊が実現できた。また、西暦2000年の多摩川を記録する運動住民参加型一斉調査の遂行にあたっての資材購入や通信連絡のために助成金を使わせていただき、少なくとも一斉調査に関する限り所期の予定通り計画を進めることができた。この助成事業によってまとめられた記録は今後ますますその価値が認められるようになると期待されるし、またそうなると確信している。

「住民の眼で見つづけた多摩川の30年」
— 蓄積データ解析による自然の変遷と自然観の変化についての研究 —

（研究助成・一般研究VOL.24—№135）

著　者　柴田隆行
発行日　2002年3月31日
発　行　財団法人 とうきゅう環境浄化財団
〒150-0002
渋谷区渋谷1－16－14（渋谷地下鉄ビル内）
TEL（03）3400－9142
FAX（03）3400－9141